AACK 京都大学学士山岳会 No.95

Newsletter

December 2020

http://www.aack.info

目　次

玉山と臥蛇島の一等三角点　斎藤清明 1
笹谷哲也さん追悼（2020 年 4 月 21 日逝去）
我が友　笹谷 BB　原田道雄 5
笹谷哲也さんの思い出　松井千秋 7
BB の思い出　谷口　朗 8
笹谷哲也君追悼　廣瀬健三 10
笹谷哲也追悼　斎藤惇生 10
無私の人ベベを想う　酒井敏明 12
たしかな国際的視野の持ち主を偲んで　谷　泰 15
BB チャン追悼　1961 年 9 月 30 日の出来事　岩坪五郎 16
忘れることが出来ない友、ベベちゃんへ　松浦祥次郎.....17
笹谷哲也 BB ちゃんを偲ぶ　小澤良夫 19
笹谷さんを偲ぶ　野村高史 20
ベベちゃん、今度はどこ行こか。　田中二郎 21
俺はもう十分にやった　栗田靖之 23
ベベちゃんとオペラ　島田喜代男.....25
笹谷ベベさんとの旅を回想する　田中昌二郎.....26
追悼　笹谷ベベちゃん　能田　成 31
BB ちゃんに見せてもらった世界　甲斐邦男 32
ベベさんからいただいたもの　山田和人 32
お世話になりました　横山宏太郎.....33
会員動向 34
編集後記 34

玉山と臥蛇島の一等三角点

斎藤清明

昨夏、台湾の最高峰、玉山（ユイシャン 3952m）に登った。

玉山は、日本が台湾を治めていたころは新高山（ニイタカヤマ）と呼ばれ、富士山よりも高い「日本一の山」だった。以前 AACK ルームにあった鹿野忠雄『山と雲と蕃人と』（1941 年）を読んで、そこに描かれた新高山に魅了され、いつかこの山に登りたいとおもっていた。

鹿野は東京帝国大学（地理学科）出身だが、この本を出した年に京都帝国大学で理学博士を授与されている。そのとき入洛した鹿野を囲んで、今西錦司さんらが祝宴を催した。その折の写真には、今西、鹿野と並んで森下正明、可児藤吉、安江安宣さんらがいて、先輩らの若い姿が印象的だった。この数年後の太平洋戦争末期に、鹿野は調査に訪れたボルネオで消息を絶ち、可児はフィリピンで戦死したので、なおさら。

さて、玉山へはツアーに参加するのがふつうで、個人では難しそうだ。日本の国立公園にあたる玉山国家公園が管理する登山小屋（頂上直下にある排雲山荘）の定員（一日に 92 名、うち外国人枠 24 名）しか入山できない。

二カ月前から受け付け、ひと月前に抽選がある。なかなかの競争倍率のようだが、ダメ元とおもって、玉山国家公園の専用サイトをひらいた。5 月下旬、ちょうどひと月前ギリギリに申し込んだところ、数日後に OK がきた。外国人枠が一人分空いたようだ。

玉山頂上。主峰碑が一等三角点よりも高くして設置されている。

6月25日。関西空港から高雄に飛び、台湾国鉄の自強号で嘉義へ。駅前のホステルに泊まり、翌朝、始発のバスで阿里山にあがった。まず、阿里山バスターミナルで、日月譚行13時発の員林交通バスを上東埔まで買っておいた。その乗車まで、国家森林遊楽区で過ごした。整備された遊歩道がずっと続き、巨木の標識も丁寧で、かっての大森林をしのんだ。森林鉄道も観光客を乗せ、一部区間動いていた。

上東埔までバスで30分ほど。高度は約2500mほどで、玉山登山の駐車場になっている。予約しておいた東埔山荘に行く。台湾大学実験林（もとは東京帝大演習林）の宿舎でもあり、昆虫類などのパネル展示が室内にあった。宿泊300元、夕食200元。足慣らしに、近くの塔塔加ビジターセンターを訪ねた。玉山や国家公園のパネルが展示してあり、日本語の案内フィルムを上映してくれた。山荘には、夕方から続々と車で客がやって来た。50人余りになった。

27日。5時前から明るくなったが、小雨だ。朝食の粥を食べるうちに晴れ間も出てくる。他の客よりも先に出発する。すぐに、排雲登山サービスセンターに着く。6時15分に受付が始まり、予約メールを見せて排雲山荘宿泊費480元を払う。待機中のマイクロバスに乗って（100元）、10分ほどで登山口（塔塔加鞍部）着。

ここは高度2600m。この日は、3400mにある排雲山荘まで、距離8キロ半、高度差800mを登る。登山道は尾根に沿って山腹を緩やかに延びている。

6時45分、出発。同じシャトル車で来た一行の殿を、ゆっくりと歩く。ところどころに急登があるが、歩きやすい。樹林帯のなかを行く。テッポウユリやキンポウゲのような花が目につく。モンロー亭と呼ぶ休憩所の辺りが温帯林と寒帯林の境目、との標示がある。マメザクラらしきのが満開で鮮やか。

玉山前峰分岐を過ぎると深々とした森林になった。タイワンツガ、ニイタカトウヒ、そしてニイタカトドマツが大きく伸びている。桟道が橋代わりに掛かる個所が多くなる。9時すぎ、下山してくる最初の登山者とすれちがう。自然景観の説明パネルが各所にあり、バイオトイレが二か所に設けられ、道普請の作業もしていた。

雨がきつくなったが、急登を上り切ったところが排雲山荘だった。11時55分到着。予約番号の8号室に入る。二階のマットを敷いた大部屋。シュラフを300元で借り、夕食代300元と朝食代150元を払う。日本人客は他にいないようだ。白人の女性や外人の家族連れが10人ほどいた。

昼過ぎに陽が出て、霧も上がった。玉山西峰の方へ散歩する。主峰から南峰にかけての岩壁が見渡せたが、主峰への登りはきつそうだ。夕食は5時から。一階食堂に、食券を手に並ぶ。一皿プレートに飯、肉、野菜を盛られ、汁を椀に取って食べるだけ。トイレは外にあり（夜間は内部のも使えた）。あとは寝るだけ。

28日。午前1時起き。ベランダに出ると、満天の星空だ。いい天気になりそう。食堂に並び、マントーとお粥だけの朝食。2時半、ヘッドライトを点けて、出発する。宿泊客が続々と

出て行く。樹林帯をジグザグに上がり、やがて低木帯になる。4時ごろ、三日月が出た。急な岩場になり、覆い屋根付き部分を通過。さらに急登すると、頂上だった。5時25分、玉山主峰に着いた。ちょうど、陽が出た直後。360度の展望だ。

なんと、一等三角点があるではないか。日本と同じの。三角点を撫でて、写真を撮ってもらう。『山と雲と蕃人と』復刻版（2002年　文遊社）に、日本統治時代の新高山頂上写真があり、櫓や祠も写っているが、三角点があるとはおもいもよらなかった。

その三角点の側に、玉山主峰碑がコンクリート台で設けてある。三角点よりも高くして。みなさん、碑を囲んだり乗ったりして喜んでいるが、私は三角点を撫でるだけで満足だった。風当たりの少ない場所に移動し、展望を楽しむ。いちいち同定しないが鹿野の本でお馴染みの山なみだ。雲海に浮いているのをパノラマ写真に撮る。台湾人グループから沸かしたコーヒーをふるまわれた。

三角点にあらためてタッチしてから下る。急傾斜で怖いが、かえって慎重になる。草付きにウスユキソウが群生している。キンポウゲも。足の筋肉が張って痛いが、ぐんぐん下る。7時前に山荘に戻る。

すぐに、下山を開始。ゆっくり歩いて、後続に次々に抜かれていったが、すばらしい森林を楽しんだ。足も痛かった。登山口に11時45分着。マイクロバスが待っていた。排雲登山サービスセンターに寄ってから、上東埔バス停で日月潭行のバスを待つ。

日月潭に着いて、さらにバスで埔里に行く。台湾のほぼ真ん中に位置している埔里は、蝶の名所として知られる。日本人経営のゲストハウスに三泊し、「彩蝶夢谷」や木生昆虫博物館で蝶を楽しんだ。また、霧社や清境農場を訪ね、台湾の国道の最高地点の武嶺（3275m）までバスで行って、合歓山の山なみを眺めてきた。

〇一等三角点

玉山の一等三角点が気になって、帰国後、京都に事務局がある「一等三角点研究会」会長、大槻雅弘さんにたずねた。同会は今西さんが音頭をとって発足し、いまは斎藤惇生（Y）さんが顧問。すると、大部の資料を添えて教えていただいた。

おどろいたことに、台湾には93山に一等三角点があるそうだ。半世紀にわたる日本統治時代に、九州ほどの広さの台湾の全土が測量されて地図がつくられ、中華民国になって改測もされたが、同国の測量部は一等三角点を公認しているという。

日本で3000m以上の一等三角点は、赤石岳、前穂高岳、御岳山、乗鞍岳の4山（富士山は二等三角点）だが、台湾には11山に一等三角点がある。じつに、山岳国だといえよう。

朝鮮半島でも「併合」後に参謀本部陸地測量部が五万分の一地図を作製、三角点を設置している。その最高峰の白頭山（2774m、中国名は長白山）にもあるはずだが、私が2006年に中国側から登った際には気づかなかった。

当時の日本の領土には、隅々にまで三角点が設置されていたという。もちろん、千島列島にも。そして、国土地理院は北方四島の20の山々を、「日本の主な山」（1023山）に入れている。

〇臥蛇島

年末に、大槻さんから研究会の会報が届いた。その巻頭に、鹿児島県トカラ列島臥蛇（がじゃ）島の一等三角点探索記録が載っていた。

島で最も高い御岳（497m）に、明治43（1910）年設置の一等三角点（点名・臥蛇島）があるが、同会が『登山案内　一等三角点全国ガイド』（正編2011年、続編2013年　ナカニシヤ出版）を刊行した際には、現地を探索できていなかった。臥蛇島は1970年7月に最後の家族が島を離れて以来、無人島になっていたから。

同会ではあらためて数年前から探索にアタックしてきたが、台風など天候に恵まず、上陸できなかった。やっと2018年9月に、鹿児島大学の調査チームとともに臥蛇島に上陸し、御岳に登って一等三角点を確認したのだ。

なかなか感動的な探索紀だった。とともに、私にも記憶がよみがえってきた。学生時代の1969年夏、当時は沖縄返還前で、日本の最南端だった奄美諸島からトカラ列島、屋久島と巡った際に、たしか、臥蛇島の御岳にも登ったはずだと。

その記憶をたどってみると、十島村の村営「十島丸」で臥蛇島に8月14日に着いて、5日間滞在していた。絶壁の切り立った島だが、短い

桟橋が設けられていた。下船したのは私と鹿児島大学生の二人だけ。この船で離島する家族と入れ替わるかたちになった。一家で大阪に移住するという。桟橋から離れていく十島丸に向かって、ばあさんが一人、赤と白の布を先端に付けた竹竿を振っていた。船が島かげの向こうに見えなくなっても。

臥蛇島はカツオ漁で栄え、往時は40戸もあったそうだが、このときは（1969年8月）5戸ほどだった。一軒は老人の独居で、壮年の男は4人だけ。駐在員や総代、青年団長、社務所番を分担していたが、共同体としてはもう風前の灯のようだった。他に、灯台に2人が半月交代勤務で来ていた。

社務所に泊めてもらい、自炊して過ごした。御岳には、島の子ども二人に案内してもらって登った。その時には、三角点には気づかなかったが、頂から島全体が見渡せて、サンゴ礁が透き通って見えたのを覚えている。隣の平島とは20キロも離れていて、まさに孤島だとおもった。

そして、その一年後に、3家族14人が十島丸で離島し、臥蛇島は無人になった。

現在、十島村役場のホームページを見ると、トカラ列島各島の船着き場は整備されてフェリー十島丸が接岸でき、道路も立派で車も走っている。人口も当時よりそれほど減ってはいない。民宿もあって、釣り人や観光客も訪れているようだ。しかし、臥蛇島だけはずっと無人のまま。

ということは、臥蛇島一等三角点には、私らのあと半世紀後の大槻さんらまで、おそらく誰も登っていないのかもしれない。そして、今春また、大槻さんから知らせがきた。

研究会員の永峯麗子さん（もと十島村の教員）が、私と一緒に登った子どもらの消息を調べてくれたのだ。中学生だった二人は、家族とともに離島し、一人は20年ほど前に亡くなり、一人は鹿児島市の障がい者施設に入っているとのこと。

二人の名前も忘れ、写真もとっていなかったのだが、三角点とともに元気な姿がうかんでくる。

（追記）

玉山で一等三角点を再認識したせいか、最近よく登っている故郷の紀伊半島の山でも、一等三角点のあるのを選ぶようになってきた。昨2019年9月に奈良・和歌山県境の果無山脈・冷水山（1262m）、今年は子年にちなんで三重県の子ノ泊山（907m）に登った。そして、11月23日に和歌山県の法師山（1120m）を予定している。

笹谷哲也さん追悼（2020 年 4 月 21 日逝去）

我が友　笹谷 BB

原田道雄

BB との山行

BB と初めて山行を共にしたのは 2 回生のときの南アルプスの縦走だった。聖岳から光・最南端の信濃俣岳までの縦走である。人の少ない、誠に気持良いものであったが最後が印象深い。長い縦走中にしばしば不便な思いをして釣竿を持って歩いていたのは浜君だった。縦走の最後の下りで河原に降りた。早速、浜君が竿を出し捕まえたアブを餌にして、あっという間に大きなアマゴを 2 匹釣り上げた。予定にはなかったのだが、衆議一決その場でもう一泊する事となった。

後年、山岳部の同級生で寸又峡に行き、同期会をやろうと BB が提案していたが、残念ながらこれは実現する事はなかった。BB もあの山行に思い出が深かったのは相違ない。

後年あれだけ付合ったのに、意外にも山行を共にしたのは、この 1 回だけだった。

野村さんとの親交

山の話ではないのだが、BB は野村さんと親交が深かった。野村さんとは野村財閥の 3 代目の野村さんの事である。

野村さんに伺った話では、BB は岡崎にある野村別邸の庭園の存続、保存について種々の相談にのり、知恵を貸していたようである。一般には公開されていないが、先年は平成天皇皇后が訪れた名庭である。

島田（ケロ）の案内で、ベローナのオペラを見に行った。会場はローマ時代の大きな円形劇場で、一週間ぶっ続けに見た。野村さんも一緒だった。旅の後、BB から電話があり、野村さんがお茶に誘ってくれているというのだ。山岳部の仲間数名と恐る恐る出掛けたのだが、まず最初は庭園の池に浮かぶ屋形船の中の茶室でお茶会であった。日も暮れかけた頃、庭を一望できる座敷で食事が始まった。

するとである、庭のあちこちに松明が焚かれ、この上ない雰囲気となった。我々はつい山岳部流の飲み方で盛り上がり、かなり羽目を外しながら大いに楽しんだ。今は野村別邸も重要文化財に指定され、そんな事はとても出来ない話ではある。生前 BB からは他言するなと言われていたが、BB の父親は大阪でも著名な逸材であったようで、先代の野村さんと親交があったようである。

2019 年 10 月 26 日、斎藤 Y さんを囲んで（東華菜館）、右から小澤、笹谷、脇野夫人、斎藤、小澤夫人、脇野、笹谷夫人、原田。

中国奥地の旅行

BB との中国奥地旅行は数回に及ぶ。いずれも 20 日を超す長旅だった。

BB も私も会社をやっていて、月末を避ければ長期の休暇が取れた事が大きい。

一番最初は奥さんのアサミさんと 3 人で、呼和浩特（フフホト）から西へ、地球儀でも指摘できるくらいの長距離を旅した。

途中、鉄鋼生産量世界一を目指して作られた数多くの小さな熔鉱炉を見た。ナベカマまで熔かして世界一になったと聞いた、何とも愚かしくも恐ろしい事をやる国だと、BB と話し合った。

博物館で雲を足下に踏みしめて駆ける馬の群

れの国宝を見て、その造形の美と共に蒙古民族がいかに馬を知り、馬に思い入れがあるかを知った。

また、銀川（旧名寧夏）の辺りで、この辺りではもう土塁になっている万里の頂上の切れ目から向こうの景色を遠望して、この奥はもう昔の蒙古だと聞かされ、思わずアサミさんが今すぐ行きたいと言い出すほど魅入られたことを思い出す。すかさず翌年ゴビの砂漠一周の旅をする事となった。BB の旅はさらに西に向かいチベットを目指した。

最後の旅行は BB と 2 人だけでインド国境に向かうものだった。林芝（リンチ）に新しくできた空港はナムチャバルワ（7782m）をかすめて降りていく。BB によると中国一、着陸が難しい空港であるらしい。恐らく対インド用の軍用空港なのだろうと思われる。この旅は困難の連続だった。途中までは立派な道路が人為的に寸断されていて、ある日は 13 時間も走り続け、宿泊場所に到着したのは夜中を過ぎていた。食事はなく、BB の持っていたアーモンドグリコをパイチュウで流し込んで夕食としたりした。

インド国境に近づくにつれ、軍隊の宿舎もやたら多くなった。検問が厳しくなり、自動小銃やピストルをぶら下げた兵隊が車を取り囲み検問する。二回そんな目に遭って、我々は旅行許可の下りている県の、はるか手前で諦めて引き返した。中印国境がいかに緊張しているかを思い知った旅だった。

その帰りに、梅里雲山の麓の明永村に寄った。その前の旅行で BB と話し合っていた。今まで AACK は明永村には数々世話になっている。特に梅里の遭難者の遺体収容は、彼らの協力がなければ不可能な事だったろう。

何か明永村に役立ちそうな事を 2 人で考えた結果、日本に留学する人を呼ぼうという事になった。小林（バコヤシ）に依頼して候補者を選んでもらった結果、なんとそれが村長の娘さん白瑪次木（ペマッツモ）さんという事になった。

BB は村長に会って、中国語で熱心に話した。恐らく我々に任せてもらえば、娘さんの留学は心配いらない、大丈夫だ、という趣旨だったろう。

その後我々が引受人になって無事来日し、日本でいろいろな人の世話になり、最終的には同志社大学を卒業することになった。そして話はさらに続き、彼女は京大山岳部の OB と結婚することとなり、村長も呼んで吉田山で式を挙げた。ペマさんは現在、岐阜に住んでいて子育てをしている。

一つの行為が時には思いもつかない結果に至ることを改めて感じた事であった。

山小屋

今思えば、私が京大山岳部にいたことは、大変幸せなことであった。一つの心の拠り所としてこれ迄の人生を生きてきた気がする。それは長い時間、起居を共にする山行を通じ、互いの気心を知りあえたり、労苦を共にしてチームワークを発揮し、時には大きな目標を達成したり、そうしたことで出来上がった絆で結ばれた友人達だからだろう。そしてそれを更に深めた一つが、笹ヶ峰ヒュッテであったように思うのだ。

BB が原小屋の隣に山小屋を建てたのは 1983 年の秋であった。場所が五八木の辺りの笹ヶ峰の一角で、スキー場のそばという事もあり、私は足繁く訪れ、幾度となく BB と話しながら北陸道を走ったものだ。

そこは、いつも山仲間が集う居心地の良い場所であった。私は BB ヒュッテに通うことによって、多くの人と知り合いになった。特に多くの後輩の人達と顔見知りになり、後々まで付き合うようになったのは、幸せな事だった。あの小屋での生活がなければ、私の人生はもっと他人との交流の少ない、味気ないものになっていたと思う。

そして BB 小屋での経験を活かし、笹ヶ峰ヒュッテの改築の話が出てくるのも、一つの必然であったかもしれない。

田中二郎（当時山岳部長）の発意で、壊れかかった旧ヒュッテを建て直そうとなったとき、真っ先にやろうと言い出したのは BB だった。資金の目途もないまま、すぐにスタートした。

土木の専門家小沢も加わり、東京からは毎土曜日に原君も参加して会議を続けた。小沢の紹介で、日建設計 OB の中津さんも設計に参加してくれた。まさに総意を集結し、再建に向け邁進したのだった。

田中二郎君の懸命な努力や、皆様のご協力もあり、資金の目途がつき、わずか 6 か月で無事完成、開所式を迎える事ができた。

その後は、原君と奥さんの世都子さんの御尽力で 10 回を超える音楽イベント、笹ヶ峰コン

サートが開かれ、大勢の方々が笹ヶ峰に集まってくださった。正にBBヒュッテが拠点となって笹ヶ峰ヒュッテが甦ったのである。

BBとの数限りない付き合いの思い出は尽きる事がない。

私の意識が無くなる瞬間まで、BBは私の中で生きている。

笹谷哲也さんの思い出

松井千秋

昭和32年に山岳部に入った者は20名ほどいたが、笹谷（ベベ）と一緒の山は1回生の時の秋の鹿島槍ヶ岳で、2つのパーティーに分かれて、笹谷がダイレクト尾根、私が鎌尾根を登った。この山行以外は記憶が確かでない。昔の記録を調べてみると、2回生の春山合宿「黒部源流の山と谷」は一緒だったが、大人数で同じパーティーでの登攀は無かった。この合宿の記録で目を引いたのは、笹谷が食料係として担当した、総勢25名・入山日数21日の食糧計画である。軽量化を工夫し、燃料100ccを含めて重量を1人1日850gに収め、3200kcalを確保している。この数値は60年後の今でも簡単ではないように思う。しかし、笹谷は1人1日食費170円の目標が達成出来なかったことを反省点として書き残している。部活動で笹谷は北海道や南アルプスを好み、私は北アルプスを好んだことで、一緒の山行が少なかったのだろう。卒業後、昭和43年に私は九州に移り、長らく会う機会は無かったが、昭和50年代、笹谷の山小屋に何かの集まりで行った。久しぶりの再会で夜明けまで飲み明かしたことだけを覚えている。

笹谷との付き合いが深くなったのは、私が定年退職した2001年以降で、私が大阪の日本建築総合試験所の委員会に行くようになってからである。関西には笹谷のほか、昔の仲間の原田道雄（A助）、脇野征一、小沢良夫（ポンタ）が在住していて、一緒に大阪近辺で会合するようになった。近江今津の「丁子屋」、大津の「ムツゴロウ」、食通の開高健がよく通ったという大阪の「エプバンタイユ」などで歓談した。国内だけでなく、海外の旅も笹谷が企画した。特に印象に残るのは2006年10月の東チベットの旅（雲南・東蔵考察団）である。参加者は同期の原田A助、福本昌弘、後輩の田中昌二郎、伊藤寿男、先輩の寺本巌さんの7人、それに旅の途中で調査を終えた京大医学調査団の松林公蔵さんら4人が加わり総勢11人になった。雲南省のシャングリラ(3300m)からラサ(3700m)まで、チベット人の運転する四輪駆動車で、4、5千mの峠をいくつか越え、茶馬古道、川蔵公路を通り12日間かけて2100kmほど走った(写真1、2)。

村や町の宿に泊まり、途中、公路を離れて氷河に近づき、高峰、森林、渓流など大自然を眺めた。この旅で私は、各地の山村に日本の校

写真1　旅の初日、金沙江を見下ろして　2006.10
左から笹谷・原田・田中・伊藤・福本・寺本

写真2　首府ラサを目指して　2006.10

写真３　カスバ湖から流れ出る川辺で　2009.7
右から原田・笹谷夫妻・野村・島田・松井

倉造と同じ構法の民家が多数存在していることに驚き、ラサでは17世紀に建てられた長さ370m、高さ110m、石材と木材による構造の13層の壮大なポタラ宮に感動した。参加者も未踏の山々の同定など、それぞれチベットの自然と文化の一端にふれて旅を楽しんだ。

この旅行の申請書は4通も用意しなければならないなど、笹谷には許可を取るのに相当苦労があったらしい。旅行中はいつも事務用の手提げカバンを持っていて、宿の支払いなど事務的な仕事を全て引き受けていた。宿で夕食の後、誰かが何処からか地元の酒を手に入れてきて皆で飲んだ。次の朝、笹谷がそのことを知って、「安物の酒で失明したり、死んだりした人間は多い」と大変怒った。また、各地に人民解放軍がいるから「道端で日本語でも政治的な話はするな」と注意された。団長として常に旅の安全に気を配っていた。

2009年7月、笹谷に誘われて、北緯60度あたりのカナダのカスバ湖にマス釣りに行った。参加者は、笹谷夫妻の他、原田A助、後輩の野村高史、島田喜代男の6人である（写真3）。琵琶湖の2倍ほどの大きな湖の周囲は、森林を切り開いた滑走路と釣りロッジなどの建物の他、人工物は何もない。静かな自然の中に一週間ほど滞在して、湖と湖から流れ出る川でボートからルアーでマスを釣った。ここでは、釣れた魚は全て湖に戻すルールになっていたが、ガイドの許可を得て手頃の大きさのレイクトラウトを数匹確保し、湖畔での昼食時に刺身やてんぷらにして味わった。ワサビや醤油などは笹谷が用意していた。笹谷は、各国から来た釣客らと談話室や食堂で、海外で長く仕事をしてきた国際人らしく、楽しそうに話していた。私は海外のマス釣りは初めてであったが、体長90cmのレイクトラウトの大物を釣り上げるなど、至福の時を過ごした。

2010年2月の香港・マカオの旅では、笹谷夫妻といつもの仲間に先輩の斎藤惇生さんが加わり、笹谷が特に選んだ店と料理で我々を楽しませてくれた。小浜、天草、支笏湖、江田島、宮島、の旅でも土地の料理を楽しんだ。支笏湖畔での雪見酒には山口良治（ガチャ）が加わり、広島では原田浩（B助）も加わって瀬戸内海の魚料理で歓談した。寺本巌さんは2006年の東チベットの旅以来、国内での私たちの会食や旅にもよく参加されて親しくなった。昨年は寺本さんが亡くなり、今年は笹谷が亡くなって、大変寂しくなった。人との繋がりの輪を広げてその中に入れてもらい、私の人生に多くの喜びを与えてくれた、笹谷哲也さんに深く感謝しつつ、ご冥福をお祈りします。

BBの思い出

谷口　朗

山学部　卒業の辞

「・・・大学四年間の歴史はこのルームの中にあって　その外にはなにもないのだから無理もなかろうと思うのですが　B助はもう出発しA助は今夜　小浜は明日　全く人を送るというのは淋しいものである。

悪友といってしまえばそれだけだが今となっては得がたき良友である。

大学へ入る時は、あれもしたい、これもしたいと思ったが、結局山学部へ入っただけが人生最大の痛快事であったと言える。

これからは大阪で丁稚奉公まず山へ入るヒマ

はないと思うが、まあ失業したらHUTTEの番人でもやとって下さい。

色々と書きたいが万感胸に迫って何も書けない。三回生以下のみなさんよ、クロ達留年組をよろしく頼みます。　BB」

60年前　BB（笹谷）がルーム日誌に残したメモである。当時のルーム日誌を5冊の冊子にしてBBたち関西の仲間が作成してくれた。この5冊に我々の青春の全てが詰まっている。部員は50名を超え年百日以上山に入るものも多くいた。そのため滑落や転落事故も多く侃々諤々の議論をしたものである。皆が色々な山行でリーダーとなりフォロアーとなった。山で最も大事なリーダーシップとフォロアーシップを身をもって体験習得した時期であった。

一回生の冬は笹ヶ峰での新人スキー合宿である。リーダーはゴロー（岩坪）さん。新人20名に上級生（OB含む）12名の大部隊であった。ベベもいた　オバマもオンボロもシオセもワキノも　ショウヘイ　フクモト　A助　B助　ケンタツ　オドラ　ガチャ　イゼキ　ナカザワ　みんないた。

ゲレンデ練習も終え火打・焼への登山の際猛吹雪に見舞われ高谷の辺りでイグルーや雪洞を作りビバークした。この時の経験こそ我々の登山とその後の交流の原点となっている。12月初めルームで「イグルーの作り方」という土倉さんの特別レクチャーがありこれが役にたった。土倉さんといえば　いつぞや福ちゃん（福本）と3人で紀州にヤマメ釣りに行った帰りアサミさんの実家にお邪魔しご馳走になったこともあった。

当時は先輩がよく山に同行してくれた。ダンナさん（中島）、ボケさん（並河）、オシメさん（酒井）、ガンコさん（左右田）、ガイガーさん（田附）などなど　厳しくもやさしい人たちばかりであった。皆元気はあるが金は無いのでよく先輩の家に行った。ガイガーさん、ゴローさん宅など帰りの頃には酔っぱらって高歌放吟、さぞご迷惑をお掛けしたのではと思っている。中でもYさん（斎藤）宅での焼肉パーティーは最高の楽しみであった。YさんにはBBはじめ殆どの仲間がその後一生に亘りお世話になっている。ピラ（竹内）などは亡くなる直前お茶の水の病室を抜け出し京都までYさんに会いに行っている。本当にありがたいことだ。

当時郊外にあった小生の家にも皆がしょっちゅう出入りし、春にはタケノコ秋にはマツタケとうるさく私がいなくとも勝手に上がりこんでいた。卒業の翌年おふくろが亡くなったがその時はベベ、オバマ、ポンタが親戚より先に駆けつけてくれた。

BBは卒業後独立し一人で香港にでた。稀にみる商才と度胸で大成功を収めたが早くにあっさりと引退した。その後は自分のやりたいことを思いきりやった悔いのない人生だったのではなかろうか？

いつまでも山岳部時代の仲間を大切にし色々な企画を立ててくれた。本当に多くの人がお世話になった、私もその一人である。どんな僻地でもいつでもアサミさんが一緒だった。

BBは後輩の面倒見も良かった。ズッパ（野村高史）やケン（田中健）、ジロー（田中二郎）、ケロ（島田）やエスキー（神山）など国内外で最後まで一緒した仲間であった。

同期は何かといえばすぐ集まった。オドラ（松井）の久住の山小屋（2003年6月）、先輩後輩にも声をかけた笹ヶ峰（2012年10月）、ケンタツ（豊嶋）の鞍馬の山小屋（2015年5月）と3回の同期会は懐かしい。いずれもBBら関西勢の発案である。

また関東では長い間、年に数回同期が集まっていたが最近は「北山会」と称して新人の時のリーダーであったコッテさん（松浦）やベコさん（村上）他下級生も入って続いている。BBは余程のことが無い限り必ず参加した、大阪からの日帰りである。A助やワキノ　ポンタも時々参加した。

直接本人に聞いたことはないが、笹ヶ峰のヒュッテ建て直し、明永村村長の娘さんペマちゃんの京都留学、ブータン王妃の関西でのアテンドなどなどはBBのイニシアティブと他同期の方々の協力が無ければ実現できなかったくらいの貢献があったと信じている。彼と関西の仲間がやってきたことは余りにも大きい。

60年間本当に深い交わりだった。本当にありがとう。ご冥福を祈る。

笹谷哲也君追悼

廣瀬健三（甲南高校同級生、甲南高校山岳部 OB）

笹谷哲也君は甲南高校時代は山岳部部員でなかったですが大変な山好きで、剣岳合宿の際も、ヒョッコリと一人で顔を出したりしていました。

思い出は、仕事面のほうが強烈です。奥さんと二人で始めた笹谷興業（繊維の貿易会社）は業界では有名で、同業者間では一目置かれていました。

当時小生は大手商社の繊維部門でそこそこやっていましたが、彼のスケールの大きいダイナミックな取引には感心したものです。中国綿布の輸入での雄；日綿、東綿を抜いて全国一に躍り出たときはびっくりしました。またハワイの民族衣装用のプリント生地の輸出でも他社を引き離し圧倒的な強さでした。ほんとうに有為の人材だったと思います。

写真１　甲南高校卒業写真集より

写真２　北アルプス剱沢にて、1955 年　甲南高校山岳部合宿に特別参加（前列左端）

笹谷哲也追悼

斎藤惇生

笹谷の病歴

類まれと言える様な才能と実行力を持っていた笹谷ベベちゃんが、皆に山、旅、酒に多くの思い出を残して、肝臓癌のため今年 4 月 21 日逝去した。2001 年から彼の健康管理と治療をしていたのでまず報告する。

2001 年体調不良で新河端病院に来院した。入院検査で高血圧、糖尿病、脂肪肝、肝障碍があり治療を開始した。その後 1 から 2 ヶ月に 1 度は夫人と来院、検査治療を欠かさなかった。2009 年内臓の精密検査で造影剤を使用しての CT 検査で、肝の右葉の比較的浅い所に径 10mm の癌が発見された。肝癌は日本人では B 型か C 型肝炎から発症するのが多く、欧米人は脂肪肝からが多い。私が脂肪肝からの癌を見つけた第一例だった。

直ぐに近畿大学奈良病院の鍋島医師に連絡、受診させた。鍋島医師は肝の専門医で、再発をくり返す前小屋（ズンム）の肝癌を 10 回もラヂオ波で焼いて助けていた名医である。（前小屋は悪性リンパ腫、肝癌は克服したが不運にも最後は膵癌で死亡した。）

笹谷の最初の癌は問題なくラヂオ波で消えた。その後 2015 年と 2017 年に再発がありラ

ヂオ波焼灼成功。しかし 2018 年の再発は部位が深くラヂオ波治療困難で、癌に流入する血管にカテーテル挿入し抗癌剤を注入する治療がなされ成功した。

2017 年には心房細動から心不全を起し全身に浮腫があり入院治療し治癒した。

2019 年には更に深部に径 4cm の再発があり、ラヂオ波もカテーテルの治療も困難で肝癌に効く唯一の抗癌剤レンビマが投与された。2014 年から鍋島医師が京都の桂にある三菱京都病院に消化器内科部長として来られたので、笹谷は桂に通院入院していた。

レンビマは効果が思わしくなく副作用もあり中止された。堺から京都への通院がしんどくなってきたので、家に近い京大系の医師のいる近畿大学病院に紹介され転院した。新河端病院には 1 月 16 日受診したのが最後だった。顔はむくんでいたが黄疸はなくいつもと同じように元気に話していた。癌は 3、4 個に増えていた。その後病状は全く好転せず悪化、最後は自宅で夫人に手厚く看とられて息をひきとった。夫人にお聞きしたのだが最後は安らかだったようだ。

現在の統計では肝癌の発症からの 10 年生存率は 15.6％で笹谷は 11 年頑張った。笹谷は患者としてはアルコールの飲量以外薬の服薬も確かで検査もすすんで受けて優秀（？）だった。

香港での思い出

笹谷と親しく接したのは1962年のサルトロ・カンリ登山隊に参加した時だった。平井一正、谷泰、上尾庄一郎と私の 4 人は、隊荷とともに日産丸という貨客船に乗り、4 月 5 日神戸を出航しパキスタン・カラチに向った。最初の寄航港は香港だった。船が港に入ると笹谷が早速ランチに乗って出迎えてくれた。彼は卒業すると香港に来て独立で端布の取引を始めていた。会計係の谷は実勢価格で交換できる香港で貴重な外貨＄をパキスタンルピーに交換する任務があった。停船予定は 1 日だった。笹谷の援助で無事交換できた。100 ルピーずつホッチキスで留めてあった。

私たちはみな香港は初めてだった。笹谷は昼に広東料理の飲茶（やむちゃ）の店に連れて行ってくれた。焼売、春巻などいろいろな料理を持ったウエイトレスが何人か席を廻ってくる。客は欲しいものをとって食べる。笹谷の説明を聞きながら食べたが全部美味しかった。夜は上海料理だった。初めての本場の中華料理だった。

翌日笹谷はランチに乗って見送りに来た。ランチが桟橋を離れる時、彼は「AACK 万歳」と言って両手をあげた。私たちは「ベベ頑張れ」と返した。AACK 時報の 2 号に私はよき友とうまい食物だったと書いている。

笹谷はその後も香港在住の間、香港を通過する AACK や京大の友人、知人を親切にもてなし援助していたと聞いている。

多くのベベツアー

笹谷は多くの旅行を企画しみなと出かけている。目的地、日程、移動、費用などすべて彼が勘案したものでみなにベベツアーと呼ばれていた。

2001 年彼が私の患者になってから、日常の診療に追われて忙しそうにしている私を誘ってベベツアーを計画し連れて行ってくれた。台湾が 2 回、香港、マカオが 1 回、国内では天草、そして中国内陸が 3 回だった。

2005 年 4、5 月、笹谷、寺本巌、酒井敏明、斎藤の 4 人で西寧から車で青海湖、黄河源流に近い二つの湖、そしてアムネマチンを左に見て青海省を南下して四川省の成都に到達した。壮大でわくわくした旅であった。

2006 年 8 月には笹谷夫妻、酒井、上尾、田中昌二郎、斎藤の 6 人は開通して間もない青蔵高原鉄道に始発西寧から乗車しラサに行き観光、それから雲南の中甸に飛び、徳欽、梅里雪山麓の明永村から明永氷河に行き、遭難した梅里雪山登山隊員の慰霊をした。

2009 年 9 月には笹谷夫妻、寺本、栗田靖之、斎藤の 5 人が中国東北に行った。ハルビンから笹谷の会社にいたことのある大阪市大出身の女性許宇紅さんと他に 2 人が同行した。ハルビンではシベリア虎 500 頭（？）が保護飼育されている施設を見た。ハルビンから車で南下、中朝国境近くの二道白河、ここから 4 輪駆動車で長白山（白頭山）に登り、赤褐色の火口壁に囲まれた青緑色の湖天池に感動した。梅棹忠夫さんはこの景観を悪魔的、デモーニッシュに感じたと書いている（白頭山の青春）。このあと高句麗の古都集安へ行き、遺跡、歴史の教科書に必ずある好太王の碑を見た。瀋陽から帰途についた。この旅行の報告は栗田が Newsletter

No.51（Nov. 2009）に詳述している。

2015年の3月の台湾が最後になった。2012年私が奈良の白鬚岳で転落、頸椎骨折し半年入院したことがあり、しばらく笹谷の誘いは無かった。寺本が台湾に行ったことが無いので行きたいと言ったらしくべべツアーが実現した。笹谷夫妻、寺本、斎藤の4人だった。台北観光して私が1964～65年、1年半指導に行っていた羅東の博愛医院を訪ねてから礁渓温泉に泊った。私がいたころはしょぼくれた温泉だったが、大きなホテルができて大観光地になっていた。寺本は大満足のようだった。寺本も前立腺癌で2019年逝ってしまった。寺本にとっても最後の海外旅行だった。

いずれの旅も中国の事情に精通し、英語、北京語、広東語が話せ、現地に多くの人脈を持っている笹谷だから安全無事にできたと思う。身のまわりのものを持って関空に行き、後は笹谷にまかせきりの楽な旅になった。本当に多くの思い出を作ってくれ一足先に逝ってしまった快男児の冥福を心から祈って止まない。

無私の人べべを想う

酒井敏明

笹谷哲也さんはべべという愛称で呼ばれるのが普通であった。笹谷さん、笹谷くん、またはササタニと呼ばれるのを聞いた経験はほとんどない。話しかけるときにはべべさん、べべちゃん、べべ、と使い分ける。3人称としてはべべが一番使いやすかったように思う。

大阪生まれ、お父さんが船場で商売をしておられたというふうに聞いた記憶があるけど、間違っているかも知れない。経済学部学生であったが、授業や教室の話を聞いたことはない。齢が6～7歳離れていたせいであろう。

私は1956年3月に卒業したのでそのとき1回生だった竹内ピラさんとその同期生たちとは涸沢の夏合宿などもいっしょにやった仲であるけれども、卒業した後57年に入部してきたべべちゃんの同期生たちとは本来顔見知りの間柄にはならないはずである。私は卒業後もしばしば山岳部ルームに顔出しを続けていたので、いつの間にかお付き合いが始まったのは自然なことだ。その後私は学士入学して文学部卒業証書を2枚目も頂戴し、文学研究科に6年間在籍したりしたものだから、べべとその同学年の若い部員たちといっしょに山登りをする機会はなんどもできたのである。それらは、まことに楽しくまた想い出深い時間であって、思い起こすのがまた楽しく、私の生涯にとってもプラスになっていると思う。

べべとともにした山登りでは、1959年春の黒部川源流域合宿がやはり、最も記憶に残っている。全部で25人、有峰から太郎小屋に入り、薬師岳に登頂した。それからがたいへん。薬師沢をくだり黒部川源流をたどって雲の平の一角に前進基地を作る班と、上ノ岳、黒部五郎岳、三俣蓮華岳と稜線づたいに双六小屋に入る班とに分かれて行動した。輝ける先蹤者たちと仰ぎ見ていた三高と京都帝大時代の山岳部先輩たちが、1926年（今西錦司、西堀栄三郎、多田政忠、酒戸弥二郎など7人）および1937年（鈴木信、梅棹忠夫など4人）に黒部川支流東沢に長期雪中幕営生活を送り、多くの山頂や尾根筋、沢筋に最初のトレースを印した山行に範をとり、立案した野心的な計画であった。

黒部川源流および東沢の積雪が予想していたよりもかなり少なかったためにスキーを用いる山行が制約されたこともあり、当初計画のハイライトを達成できなかった無念は残るが、一定の成果を得ることができたと考えている。『京都大学山岳部報告』第7号に詳しい記録が載っている。隊の構成は、3回生5人、べべたち2回生8人、1回生9人、OBの藪内卓男さん、岩坪五郎さんとリーダーを仰せつかった私であった。

前年11月に私も加わった偵察隊5人が烏帽子岳小屋から二ノ沢をくだり、東沢を黒部本流との出合までくだったのち、取って返して東沢乗越へ登り、双六池まで縦走、大野間乗越から新穂高温泉へおりて、春のコースの下見を済ませていた。別に秋山シーズンに複数の荷揚げ隊

が出て、太郎小屋および双六小屋まで食料と燃料をぼっかした。

ハイライト部分、すなわち東沢乗越から東沢への滑走降、谷底からの赤牛岳登頂、そして帰幕という行程は、前進基地建設の遅れと沢身の積雪寡少を理由として取りやめを決断したことが悔やまれる。

当時は冬と春の積雪期にも山行に加わる実働参加可能部員が 50 人ちかくいて、とても合宿形式の登山は実行できないとして、もっぱら 10 人以下の分散山行を数隊出すのが慣行だったのだけれども、やはり全部員打って一丸となって当らなければならない合宿を経験する必要があるとの総意のもとに、数年ぶりに実施された二つの大規模合宿の一つが黒部源流であり、他の一つは日高山脈であった。

この 2 ヶ月ほど前、1958 年 12 月 25 日一行 8 人が豊橋から木沢まで入った。西沢渡から聖平小屋に入ったのが 3 日目、南アルプスは真冬でも北アルプスほどの大雪は無いと言われていたが、降雪で二日続きの沈殿を何度か強いられる厳寒期登山となった。聖岳、赤石岳，荒川岳と、小屋があるところではそれを利用、なければ幕営し、雪と戦う稜線歩きを堪能した。二軒小屋におりてから欲を出して北行、往復して塩見岳登頂をリストに加え、最後は転付峠を越えて 1 月 8 日に身延に出た。この時は私と藪内卓男 OB のほかは、3 回生和田光仕と、金村泰輔、笹谷哲也、谷口朗、豊嶋顕達、福本昌弘など 2 回生 5 人が仲良く、機嫌よく、山旅を楽しんでくれたのではないかと、ひそかに思っている。笹谷と谷口の二人は黒部源流にも加わってくれたのが私にはたいへんうれしかった。3 月の黒部源流合宿は人数が多かったうえに、隊は全体として西から東へ移動し、両班に分かれ、さらに小分けしたパーティごとに個別の目標を定めて行動したこともあり、複雑多様な山歩きだったのに対し、冬の南アルプスは常に同じ顔触れで狭い小屋やテントで過ごした時間が長く、付き合いは濃密ならざるをえない。2 回生だったべべはまだ本領発揮とはいえないにしても、やや面倒見が良いというか、他人の思いを大事にするような、傾向があったということができよう。

京大山岳部が海外に遠征登山隊を送ったのは 1962 年のパンジャブヒマラヤ遠征隊をもって

写真 1　1958 年 12 月末　南アルプス　聖岳（？）頂上にて酒井写す　右から左へ　藪内卓男　谷口朗　和田光仕　笹谷哲也　豊嶋顕達（すわっている）　福本昌弘　そして金村泰輔

嚆矢とする。副隊長を命ぜられた私は、4 隊員を乗せて神戸港を発した PO ラインのサンチア号がカルカッタ港（現コルカタ）に着く前に通関などの事務処理を済ませるために、宮木靖雅と二人で横浜港からプレジデントクリーブランド号に乗船、8 月 15 日香港に着いた。18 日香港からカルカッタに飛び、29 日入港した大森義次、田中二郎、富田幸次郎、岩瀬時郎たちを迎える手筈を整えることができた。香港では当時この町で実業に就いていたべべさんにたいへんお世話になった。おまけに、インドラサン初登頂に成功して帰国の途次にも、ふたたびカルカッタから空路到着した大森、富田、岩瀬と酒井は RI ラインのチチャレンカ号が寄港するまで数日滞在したので、べべには有形無形のお世話になったのである。

1958 年から 60 年代半ばまで AACK と山岳部とを合わせるとほぼ 1 年おきくらいの頻度で南アジアおよび東南アジアの各地に学術調査または登山を目的とする遠征隊を送り出していた。その往復の際に空路または海路で香港に立ち寄ったものは多かったので、べべの手を煩わした経験を持つ人は少なくなかったと思われる。いやな顔をしないで、その時々の万般にわたる要請や希望にこたえてくれたべべの度量の広さと骨身を惜しまぬサービスに接して、ただ感謝するばかりである。己を殺して仲間のため良かれと思うことを進んでおこない、無私に徹する人であった。

べべは学生のころから笹ヶ峰ヒュッテを愛好すること並々でなかった。後年杉野沢スキー場

写真２　2006 年８月チベット　ラサ近郊にて　向かって左から　斎藤惇生　田中昌二郎　笹谷哲也　上尾庄一郎　笹谷アサミ　酒井敏明

リフト乗り場近くに自分の別荘を建てた。奥さまアサミさんと、また友人たちを招いてしばしば山小屋暮らしを楽しんだことは誰もが良く知るところであろう。笹ヶ峰ヒュッテが老朽化し、あまたの議論を経たうえで、コンクリート造りの基礎部分の地下空間を一部有効に利用した木造二階建ての新設計の建物に改築する事業が始まったときにも、ベベの貢献がきわめて大きかったことは、この事業に直接かかわって事情をよく知る当事者たちがいるから、詳しく語ってくれるに違いない。

宮木靖雅がカナダ北極圏探検に意欲的に取り組んでいた 1971 年、多分カヌー操船にかかわる事故で宮木隊長ら全員が氷海に姿を消す事故が発生した。東海大学探検部から救援捜索隊が出たが成果は得られなかった。ベベは宮木を支援していてこのあと宮木夫人を助けて現場を訪れ、その後の弔慰に際しても若くして逝った後輩のために大きな力を尽くしてくれたことは忘れられない。1991 年梅里雪山で日中 17 隊員の犠牲者が出たときにも、遺骨収集に精力を注いだ小林尚礼さんや民永村村長さんなどの活動にあたたかい支援をつづけ、民永村もたびたび訪ねて村人たちとの交流を強化して貢献した。

最後にベベツアーについて。

京大山岳部が 1985 年ブータンヒマラヤ遠征隊を送りマサコン初登頂に成功したとき、10 月末～ 11 月上旬 AACK 登頂祝賀団を名乗るチームがブータン王国を訪問した。仕掛け人はベベ、実務は西遊旅行に担当させたが、ベベツアーと呼んでいいだろう。土倉九三、滝川悠紀夫の大先輩 2 人と私とその他若い面々で合わせて 10 人、カルカッタからドゥルック航空の双発高翼機でパロ空港に着いた。堀了平隊長ほか隊員たちとの祝賀交歓が終わったあと、普通の観光にはまだ門戸を閉じていたこの歴史ある仏教王国の主要なゾン（城塞・官衙・寺院の複合体）を参観し、特有の民族服を着けた人々のつましい生活の一端を垣間見て、ブータンへの親近感が深まるのをおぼえたものだ。

ベベツアーは 2000 年から数年の間頻繁に催行され、私自身 4 回仲間に入れてもらったことは今でも感謝している。2000 年 8 月には内モンゴルと敦煌、02 年 6、7 月に青海湖周辺とアムネマチン、05 年 4、5 月に黄河源流域と四川省臥龍パンダ園を訪れた。いずれもベベ子飼いの通訳と 4 駆車運転手がついてくれて、ベベが単身または令夫人と一緒に同行してくれたので、この上なく気楽でかつ安全な旅を享受してうれしかった。2006 年 8 月にはベベ夫妻のほかは斎藤惇生、上尾庄一郎、田中昌二郎各氏と私、西寧からラサ行き新空調硬座快速臥列車の 2 等寝台を利用し、眠っている間にチャンタン高原を横断してチベット自治区首都に着いた。ポタラ宮殿、ノルブリンカをはじめガンデンゴンパ、セラゴンパなどなどを 3 日間で参観し、見物した。8 月 15 日空路雲南省中甸に飛び、ランクルとパジェロに分乗して民永村に着いたのは午後 10 時。翌日、民永氷河左岸沿い歩道をのぼり約 3000m の展望台から氷河に対面､15 年前 C Ⅲで巨大雪崩に襲われて亡くなった隊員たちの無念を思い悼む真心を捧げたのである。

私はベベとともにした山歩きで彼の面倒見の良さ、笑顔を絶やさない物言い、仲間たちをまとめるゆるやかな心配りなどに、心を動かされた。そして、ベベには目立つことを控え、みずから主張することを抑制する、性向があったように思うのだが、的外れであろうか。ベベはひとが喜び、満足する様をみることを楽しむひとだ、とでもいえるだろうか。

数年来ベベは内臓のどこかに疾患があって、療養に意を用いていた。ベベツアーでともに泊まったアラシャン地方のゲル（半球型テント）の中で、また、ラサ市喜瑪拉雅飯店のレストランで、食事の時にはだれもが土地の酒やビール

をたしなむのを常としたのだが、ベベは酒を口にしても節制に努めていたようであった。

近年急に病いが進行したのであろうか、4月21日逝去されたと聞いて愕然とした。彼の最大の親友原田道雄さんが呼びかけ人なので、躊躇なく私は大好きだったベベの思い出を綴りはじめた。しかし、敬愛する若き友人、無私のサービス精神に感動を与えられ、楽しいツアーに度々呼ばれて恩義を感じている人物であるのに、ベベの人間像について私自身知ることがあまりに少なかったことに気づかされ、慌てふためき筆を執ったことを後悔している。

ベベの霊　やすらかならんことを祈る。

たしかな国際的視野の持ち主を偲んで

谷　泰

もうなんども書いたことだけれど、ベベちゃん、あれは1962年のことでしたね。あなたは、家業の貿易業を継ぎ、実地経験を身につけるべく、香港に出かけていました。おそらく大学を卒業して、まだ二年もたっていないときだったはずです。わたしは、サルトロカンリ遠征隊の現地会計係で、公定よりも安いパキスタンルピーを香港で購入すべく、あなたにその手助けをお願いしたのでした。あの頃の香港は、いまのような立派な高層ビルとは違い、それこそ地震でもあれば崩壊しそうな安普請のビルが、にょきにょきと立ちあがって、島の斜面を覆いつくしていました。港で迎えてもらい、ビルのはざまの薄汚れた細い坂道をのぼると、周囲の開け放ったビルの窓から、麻雀パイをかき混ぜる音が四方から聞こえてくる。そんなところを、あなたはすいすいと登って、働いているオフィスにつくや、待たせていた両替屋の男と、ものなれたように中国語でペラペラとしゃべって、手さばきよくルピーの札束の山を受け取り、あっという間に願いをかなえてくれたのでした。わたくしは、当時すでに28歳になっていたにもかかわらず、いまだ青二才の大学助手。それにたいして、大学卒業後まもなくの修行中だというのに、この異郷でいかにも物慣れて現地人をさばいているあなたを見て、一歩も、二歩も先に人生の先輩になっているあなたを、そこに見いだしたのでした。

その後私は、学業の方が忙しくて、親しく付き合う機会もなかったのでしたが、わたくしが70歳で大学稼業を辞め、家内の郷里、イタリアのベルガモに移ってから、チベット圏だけでなく、音楽鑑賞旅行と称して、世界各地をたずねていたあなたが、ヴェローナの音楽祭をたずねる前に、わが家をたずねてくれました。また一度は、島田ケロ君と野村ズッパ君とを連れてゆくからと予告して楽しみにしていたのでしたが、ご母堂でしたかの急の病いのために、これなくなり、やんちゃいっぱいの島田と野村の両君とだけで、不在のあなたを思いながら、ベルガモの高級レストランで食事をするということもありました。こういうあなたの音楽鑑賞旅行途上での出会いの最後は、確かスイスの山間部の避暑地ベルヴィエーで行われる夏の音楽祭に行くと言って連絡があった時でした。その村まで家内と一緒に自動車で訪れてあと、マッターホルンの尖鋒を眺めに、奥さんと原君の奥さんと一緒に、夏のひと時を愉しんだのでした。たしかその時、歩きながら、あなたの奥さんが、わたしに「結局笹谷は都会人です」とあなたを評したときに思ったこと。それをいま言いますと、ベベちゃん、あなたは確かに都会人であるけれども、おそらく堺という国際商業都市を生んだ大阪の伝統をしかと受け継いだ、些細なことには動じず、世界の情勢を的確に把握しうる、きわめて国際的な大人（タイジン）であるということでした。

最後にベベちゃん、あなたは、チベット高原から新疆にかけての地域を、広く、繰り返し旅したのでした。そこである時、それらの見聞をぜひちゃんと印刷したものに残してくださいと言ったのでした。というのも、二十世紀後半の中国奥地を、あれほど綿密に広く訪ねた人はそう多くはなく、いつかきっと二十世紀後半の中国奥地の状況をつたえる一外国人の記録として、意味をもつようになると思ったからでした。

そう、もしなんらかの記録を残しているのなら、どこにあるか伝えてください。誰かが、消えない貴重な資料として活字にしてくれるはずだから。聞こえたかな。あまり遠いから聞こえない？じゃあいい。奥さんが聞いてくれるはずだから。

BB チャン追悼　1961 年 9 月 30 日の出来事

岩坪五郎

標題の日付の少し前、農学部の大学院生になっていた荻野ヤンボーとゴローに笹谷 BB チャンから電話があった。香港で世話になったか、世話をした中国人が大阪で中華料理屋をしている。たいへんおいしい。ご馳走するから、30 日午後 4 時、扇町の大阪市大の吉良さんの部屋に来いという。

当日、私は昼食抜きで京阪特急に乗車、終点天満橋で下車、タクシーの助手後部席に乗ったところまで記憶がある。あとは淡い記憶と後日ひとから聞いた話である。

タクシーは天神橋のちかくで市電の線路を枕木まで掘り起こした部分に車輪を落とし、こちらに乗り上げて来る対向の小型トラックに激突。タクシーの運転手は自分のハンドルで胸を強打して失神。私は助手席を飛び越え、頭で前の窓ガラスを突き破ったのち、バックして助手席に着席する状態になった。その時だろう、誰かに抱きかかえられている記憶がある。

近くの外科医院に運び込まれたらしい。この耳朶、ぶら下がっていて接着不能ですから、切除して好いですかと聞かれ、はいどうぞと答えた。なにか希望のものはと聞かれ、腹が減ってたまりませんと答え、先生が家内に何か作らせましょうと言われたが、食べた記憶はない。

私が警察官に言ったのだろうか、ヤンボーと BB チャンが扇町から、京都から母親がきた。ヤンボーは探検家の作業として私の負傷の状況を記録していた。BB チャンは、あんたの母親はえげつない女やな、耳の片方くらいで男子はくよくよしてはなりません、といい、医師に、ではどうぞよろしくといって帰らはったでとあきれていた。

翌日だったか林一彦さんから電話があり、耳朶はどこにある、今月の米国外科学雑誌に、切除した耳朶を腹部に貯蔵しておいて、耳の傷が治ってから付け直したとの記録あるとのことであった。オソカリシであった。昨日、捨ててしまった。2・3 日して、医学部昭 3 卒 AACK 浅井東一さんの病院の病院車に私をのせ、阪大か、大阪市大学生の息子さんが、わが家まで運搬して下さった。しかしこの息子さんは　高速道路で単車事故で亡くなられたとか、お礼も言っていない。

我が家で 10 日ほど寝た後、京大病院に入院し、頭蓋骨内部での出血の有無の検査を受けた。脊髄液を抜き取り、空気を入れるのである。頭蓋骨内部に空気が広がるとき、もうナチスの拷問もかくやの疼痛であった。この時、私のノシャック登頂の報告を聞いたことのある医学部大学院の女子学生が白衣を着て見舞いに来た。母親は白衣姿にホレ込み、五郎をどうぞよろしくと頼んで帰ってしまった。母親の強い要請を受け、私たちは、3 ケ月後、楽友会館で、四手井先生ご夫妻の仲人で結婚式を挙げ、いまも同棲している。

BB チャンには、そのあと会うたびに、中華料理のご馳走の履行を迫ったが、実行を見たのは、つい最近、60 数年遅れて、ベベ夫妻と原田 A ちゃんとうちの夫婦で、大阪の黒門の料理屋であった。しかし高齢のせいか、味覚も臭覚も衰えていて、特急京阪電車の中で夢見た豪勢な中華料理に比べ、豪華さに劣るように感じた。

悼辞にしては、真面目さに欠けるようであるが、追悼の気持ちを申し述べたつもりである。

合掌ゴロー

忘れることが出来ない友、べべちゃんへ

松浦祥次郎

貴君（あんた）が逝ってしまって間もなく、追悼文集を作ろうという話が持ち上がり、やがてAACK Newsletter特集版にとなった。貴君との想い出は沢山にあるので、ゆっくり考えて書けばと悠長に構えていたら、あっという間に締切日の目前になった。とにかく心にいつも残っている想い出をと書き始めたが、何を選ぶかで迷い混んでしまい、意外に難しい。「思うと為すとは全く別物」というのは追悼文でも同じらしい。何が難しいかといえば、貴君のような友人、知人は他に一人も居なかったからだ。夫婦にとって親しい友人、知人と言っても普通は亭主か女房のどちらかの友人であり知人だ。だが、貴君ご夫婦はお付き合いを通じて我々夫婦に共通の沢山の想い出を作ってくれたので、夫婦二人して想い出話を書かなくてはならないと思うくらいだからだ。おそらく、我々と同じように思って居られるご夫婦が多いのではないか。貴君が多くのこのような友人、知人を作れたのは、おそらく貴君の人生設計の見事さとそれを実現しきった貴君の知力、気概、度胸、努力、健康等の言わば貴君の総合的甲斐性、それに運と地勢と時世の賜物であったのだろう。我々夫婦はまるで「驥尾の青蠅よく千里を行く」の如くに、その余得にあずからせてもらった。

僕から観ると、貴君は全く桁外れの人生、端倪すべからざる人生を生き切ったと言える。前半生は「商人：あきないびと」として、極めてクールに「物の価値は場所と、時と、人々の気持ちの関数」と読み込んで、それこそ「唐草模様の一反風呂敷に反物」から始め、商売と方々の知見を拡充し、後半生はといえばまるで財の拡充には執着せず、前半生で得た知見と財を基に最大限に活用・拡大して自由な人生を過ごした。しかも、自分だけでなく気心の知れた仲間ともその楽しみを分かち合った。これは普通人からすれば桁外れのことだ。そして何よりも羨ましいのは、人や組織に仕えることが全く無かったことだ。自分以外に主の無い人生を堪能できるとは、それだけでも最高の贅沢を楽しんだものだ。

他の仲間も同じだと思うが、貴君の想い出話はきりがない。書き切れないから、お礼を兼ねて、ここに三つだけ書かせてもらう。「頭と、足と、夫婦」のことだ。初めの「頭」の話というのは、「考える」という行為、むしろ「行」あるいは「業」と言うべきものの神髄に至れるかもしれない道を暗示してくれたことだ。いつの頃だったか忘れたが、貴君が笹ヶ峰への途中にべべヒュッテを建て、そこに貴君の近しい連中がスキーを楽しみに集まり始めて暫くした頃、誰かが「コッテさんも行きたかったらべべちゃんに電話したら」と声掛けをしてくれた。東海村の「日本原子力研究所（原研）」へ就職した昭和30年代後半当時の超多忙な現場から東京本部勤務となり、再び山やスキーも少しは楽しめるようになっていた時だった。これ幸いと直ぐに「べべちゃんですか。松浦です。」と電話した。貴君の第一声は「マツウラて誰です？」だった。「コッテや、松浦コッテやがな」と続けると「ああコッテはん。失礼しました。ご無沙汰です。」そこからは思い通り話は進み、そのあと再々にべべ小屋にお邪魔して皆さんと飲みながら侃々諤々の議論を楽しませてもらった。

そんな或る時、商売の難しさに話が移った。貴君の言うには「コッテはん、中国人、インド人、パキスタン人との商売は気をつけろとはよく聞くでしょう。しかし、ユダヤ人との商売は格別です。契約書の作り方が桁外れに厳格、厳密です。こっちも必死に確かめて、サインします。ところが、契約の実行に進むと、こちらが思いも寄らなかった契約上の隙間を突いてきて、少しでも彼らの利益になるように実施されます。そうなれば、もう後の祭りです。いつの間にこのようなこと考えつくのかと、悔しんだこと再々です。彼らの日常を考えると、彼らは毎週金曜が安息日です。この日は仕事が禁止で、ただひたすら神に祈りを捧げるのみということです。しかし人間朝から晩までお祈りだけで過ごせるはずはないでしょう。神さんを拝んでいても、商売人ならお祈りのうちにも、ひとりでに

頭は商売に向いていくでしょう。考える時間はたっぷり神さんが用意してくれるわけです。安息日にとことん神さんと一緒に考えるのです。都合の良い考えが浮かぶはずです。」

貴君がこれをユダヤ人に確かめたとは思えないが、これを聞いた時、瞬時に自分の考え方のスタイルが実に甘く緩いことを悟らされた。自分の生活の中には熟慮とか瞑想とかの時間が習慣的には組み込まれていないのだと。そして、民族として「熟慮の習慣」が生活スタイルの中に組み込まれ、それが2000年以上継続されているとは大変なことだと、妙に納得した。近・現代世界における科学上また経済上の天才的かつ創造的な仕事の驚くほどの多くがユダヤ人によって成し遂げられているのも当然かもしれない。

一方自分を省みて、それほど難しくも、高度でもないが、仕事柄いやでも考えなくてはならないことが多い人生を送らざるをえないなら、自分も熟慮や瞑想を生活習慣に繰り込まなくてはと深刻に思った。未だにしっかりとは出来ていないが、そのように心掛けなくてはと思い続けるようになったのは、貴君のこの時の話以来のこと。少なくとも、考えることを面倒がらなくなったことだけは確かだ。そして、振り返ればかなり厄介な仕事も、このことでどれほど助けられたかしれない。

二つ目の「足」の話は、いつぞや貴君がお土産にくれた「中国風の室内履き」のこと。室内履きと言ってもスリッパではなく、分厚く柔らかい布製の靴のような室内履きだ。これを履くごとに貴君を思い出す。茨城は大して北ではないが広い平野の一部のため冬の天気の良い日は放射冷却作用でかなり冷える。しかも水戸近辺は秋から春にかけての晴天日数が日本中で最多の地域だ。干し芋が水戸の名物なのは、この地域がさつま芋栽培の北限で、かつ乾燥に最適の冬日に恵まれる南限だからだ。秋から春まではかなり冷える日が多い。我が家の生活空間の半分は洋室なので部屋履きは必需品だ。というわけで自宅では夏以外の秋・冬・春と1年のうち3/4の季節は貴君のお土産を愛用するので、何くれと考えながら貴君と話しをする。かなりの年月使っているが、まだまだしっかりしているので、おそらく一生物だろう。棺桶に入るときにもこれを履かせるように遺言したいと思っている。履物のお土産というのは家族以外には余りないと思うが素敵な愛用品だ。最後まで貴君に感謝しながら生を終えることになりそうだ。

最後の話は、我々老夫婦の茶飲み話の種を山ほど残してもらったこと。原研で最後の任務に就いていた世紀の移る頃、日本で初めて原子力関係事業で放射線被ばくによる死者が出る事故（JCO事故）が起こった。原研の任務が無事に終われば第二の人生に移り、ゆっくり山を楽しめるはずであったが、この事故のため、急に原子力安全委員会に移籍されてしまい、2000年4月から6年間人生2度目の超多忙期間を過ごさなくてはならなくなってしまった。貴君が旅の重点をカラコルム、ネパール、ブータンから北のチベット、雲南、中国西域に移し始め、奥方とともに中国西域の大旅行を始めたのはちょうどその頃だったろうか。貴君から電話があった。「コッテはんは多忙で体が空かずダメやろうけど、奥さんがもし関心お持ちなら、家内も一緒に行くので西域旅行へどうですか」との特大に親切なお誘いだった。家内は大喜びで、一も二もなく連れてもらうことになった。それから連続的に3回、各回が約2000㎞の西域旅行を長江や黄河の源流、あるいは銀泉、敦煌、ウルムチ、カシュガルなど、合計約6000kmに及ぶ西域を楽しませてもらった。彼女にとっては一生楽しめる想い出の玉手箱が出来た。

貴君は僕の無念をちゃんと察してくれて、安全委員会の任期明けの2006年4月を待ちかねたように、直後の6月に並河ボケさんを隊長とする雲南の旅（石楠花原産地の花盛りを鑑賞し、それと共にミンヨン村からカワカブの氷河に至り梅里雪山遭難者の慰霊をする旅）を計画してくれた。このおかげで6年間の積り積もった鬱屈がどれほど軽くなったことか。それまで、本や人の話でのみ接したこの地域の実際の一端に触れたこと、特にその空気、水、食べ物に身をゆだね、ほんの少しだが人々と接したことが、この世界を見直すきっかけになったことは、もう余命は大して長くはないと思いながらも、残りの生を少しでも豊かにするうえで非常に大事なことと改めて思い返している。

さらに有難いのは、我々夫婦が食後など、ちょっとゆったりした気分のときに、西域や雲南の話を共通話題として楽しめるのは僕のような職業人生を送った人間としては滅多にできる

事ではないだろうと思いながら、この機会を開いてくれた貴君と奥方への感謝をお互いにいつも口にしている。

貴君が人生で一番好んだのは「ああ、ええ気分やなあ」と心広やかに感じる事であったろうと察している。しかも仲間とその気分を分ちあうことが出来るように図ったのが、仲間達をして貴君を忘れ得ない人にしているのであろう。合掌

（追記：本当の気持ちは、これを関西弁で書きたかった。そやけど、関西弁は書くのがえらく厄介や。そいで、平均文で書いてしもうた。すんまへん。）

笹谷哲也 BB ちゃんを偲ぶ

小澤良夫

ここ 10 年間ほど、大阪を本拠地に活動していた同級生が BB ちゃんと二人となって、時々、「どうや？」と電話を頂き、夕方 4 時ごろから大阪南の蕎麦屋等で会い、サッと一杯飲んで別れることが多かったのですが、ここ暫く連絡が途絶えて心配していたところ、4 月 21 日、原田 A ちゃんから電話で本当に悲しい知らせを受けました。翌日、新型コロナが広まっていましたが、二人で堺の式場に行き、大変残念な最後のお別れをし、お通夜とお葬式に出席しました。彼らしい心に残る葬儀でしたが、本当に残念で悲しいことでした。

今まで 50 年以上にわたり、彼には大変お世話になりました。特に、この 25 年間は、今では行くことがほとんど不可能な旅行に連れて行って頂きました。香港へは、何回も買い物に、中国雲南省の大理などへの旅、敦煌を含む内蒙古ゴビ砂漠ドライブの旅、万里の長城慕田峪等北京観光、台湾一週の旅、ベローナの音楽祭とイタリア旅行など、思い出に残る旅ばかりですが、ここでは、南アフリカの旅のことを紹介し、彼への感謝と追悼といたします。

南アフリカへの旅・・1994 年 4 月に、南アフリカで初めて全人種が参加した普通選挙が実施され、Nelson Mandela 氏が圧倒的多数で黒人初の大統領に就任することになりました。就任される前に南アフリカを見に行こうということになり、5 月初めに竹内ピラさん御夫妻、笹谷御夫妻と私たち夫婦の 6 人で行くことになりました。旅程は、香港→ヨハネスブルグ→チョーベ→オカバンゴ→ヴィクトリアフォールズ→ケープタウン→ヨハネスブルグ→香港でした。香港で飛行機に乗る時、ヨハネスブルグ空港が昨夜爆破されたが、今夜の Flight は出発すると言うことだったので、何とか入国できるだろう、と出発しました。

チョーベやオカバンゴ国立公園では、英国王室の方も泊まられたロッジに滞在し、カヌーや

写真 1　歩きサファリ

写真 2　Chobe Lodge での夕食会

写真３　Moana Safari Lodge

写真４　Cape Agarus

歩きサファリで、象、ライオン、キリンやカバ等を少し怖くなるほど近くで見ました。

その後、世界３大瀑布の一つである、ヴィクトリアフォールズを見たのち、ザンベジ川でのクルーズを楽しみ、ケープタウンへ。

日本では、アフリカ大陸の最南端は喜望峰と理解されていますが、実際はケープタウンの南東約 300km にあるケープアガラスであると知り、早速、車をチャーターし出向きました。

植民地時代に建設された道路網が整備されており、約７時間の快適な旅でしたが、途中に、長年の人種差別政策で生まれた、最貧層の人々が住むソエットが見受けられました。

ケープタウン最後の夜、ホテルの警備が急に厳しくなりました。これは Mandela 氏が翌日就任演説を行うため同じホテルに滞在されていたためでした。その時には、新大統領のもと、全ての国民が平等に扱われ、国家として益々発展していこうという熱気が感じ取れました。

この南アフリカの旅で、BB ちゃんはマラリアの予防接種から始まり、国立公園への Charter Flight やロッジとホテルの予約、車やガイドの手配、旅行への注意事項等を完璧に調べてくれて、我々はただついていくだけという旅でした。

上に挙げたすべての旅でも同じでありました。彼はまずよく下調べをして、必要な情報を得て、得意の語学力を生かして交渉し、旅行中に困らないよう事前に準備をして連れて行ってくれました。これらの旅はいずれも行くことが相当難しいものでしたが、BB ちゃんから、旅はこのようにするのだ、と言うことを教わった気がしています。

最後になりますが、彼は 100 歳まで生きるぞ、と言っていた時もあり、信じていたのですが、20 歳も若く亡くなり本当に残念でなりません。今は心よりご冥福をお祈りします。

笹谷さんを偲ぶ

野村高史

笹谷 BB さんを偲んでというより、こんなに急に彼を失ってしまうとは思いもよらず、びっくりしています。逝去される少し前に話していたことがどうだったのかと思います。

山岳部に入部して１年は学校もはなれていましたのでそれ程ではなかったが、その後は本当に色んなことで一緒に活動したな !! という思いです。二学年よりは何かにつけ教えてもらいました。まずは広く関西学連での活動でした。京大のみならず阪大、神大、同志社といった関西の山岳部の活動について広く情報交換をするというものです。他大学の山岳部がどういった活動をしているかを知るのも、それなりに面白いものでした。

これとは別に我々山岳部の活動の情報は部内にありあまる程あります。なかでも冬山春山

の合同合宿に有意義なものがあります。特に1960年の合同合宿は色々な意味で有意義でした。黒部渓谷を対象とし、黒部十字峡を横断する隊と、黒部のさらに奥深く、中流域で広く深く活動する隊でした。これらの活動でずい分広く多くのことを学んだと思います。これ等の山岳部の活動の情報は、部が発行した部報でそれぞれくわしく得られると思います。

1959年入部の田中二郎君はアフリカ研究が専門でした。彼を加え、笹谷ベベちゃんが中心となって計画したのは、アフリカ縦断、即ちアフリカ最南端からエジプト・カイロまで車で走ろうというものでした。残念ながら当時の政治の動きからエジプト・カイロまでは出来ず中断してしまいましたが、2005年8月25日に南アフリカ・ヨハネスブルグに集った田中二郎、笹谷ベベちゃんそして私のほか学生3名、トータル8名が8月25日より二台の車で18000キロを走破したものです。残念ながらケニア北部トゥルカナ近くでギブアップせざるを得ず、69日の旅行となりました。通過した国々では多くの人達との交流が出来たと思います。ベベちゃんとの交友で多くのことを学んだと思います。

ベベちゃん、今度はどこ行こか。

田中二郎

1959年4月に入部して、1回生のときは宇治分校へ通いましたが、それでも毎週水曜日には西部構内のルームへ行きました。山岳部のルームはいつも活気あふれてましたね。7月の岩登り合宿は穂高へ行きましたが、ベベちゃんと本格的に山行を共にしたのはあれが最初だったと思います。8月にはコイボクシュシビチャリ川を遡行してカムイエクウチカシ山へと連れていってもらった。日高の後は帯広の方へとまわり、石狩岳→五色ヶ原→トムラウシへと行きましたが、石狩川源流のせせらぎで小さいながらも岩魚を仰山釣りましたね。いちいち焼くのも大変で飯盒でバター炒めしましたっけ。11月には恒例の富士山での1回生用のアイゼン訓練に付き合ってもらいました。2回生の秋10月に「野呂川へ岩魚釣りに行こ」とベベちゃんに誘われて堀内コンゴと3人で行きましたね。三峰川あたりで釣り竿を振り回したが結局1匹も釣れずじまいで、「米と味噌だけ持って行ったらええやろ」というベベちゃんの言葉に釣られてひもじい思いをしました。北岳まで登ったり3、4日歩きまわってタンパク質不足でバテかけていたときに沢の真ん中で伊藤寿男、岡阪令のパーティーにぱったりと出会い、ペミカンをたっぷり恵んでもらってお陰様で飢餓感を癒すことができました。

ベベちゃんは2年上級生だったので、翌年3月には卒業してしまい、家業の繊維商を継いで香港へ行ってしまった。でも私らは日本初の大学生現役主体のヒマラヤ遠征計画を立て、パンジャブ地方のインドラサン初登頂を目指して船出し、香港に寄港してばっちりとお世話になりましたな。何年もあちらで商売をしておられた香港から帰られてからは、専ら大阪や京都で飲み屋での付き合いでしたね。私も京大を卒業後は、東京、犬山、弘前と転々としてたので、1986年に京都へ戻ってからのことになります。

あ、そうか、妙高高原杉ノ原スキー場の中腹に快適な山小屋を建てておられ、ベベ小屋と称してみんなでよく泊まりに行かせてもらいました。お若くて元気だったころはベベちゃんも暮れから正月は小屋におられ、よう飲んだくれましたね。私は正月から1カ月以上も夫婦で泊まり込んでスキーしたこともありました。笹ヶ峰ヒュッテへ行く途中にもなるので、あのベベ小屋は本当によくお世話になりました。

「おい、ジロー、アフリカ縦断をやろう」とベベちゃんが言いだしたのは2003年秋のことでした。私が南部アフリカのカラハリ砂漠で狩猟採集民ブッシュマンの調査に入り浸り、ケニア北部の砂漠地帯でもラクダや牛、ヤギを遊牧するレンディーレ、ポコット、トゥルカナの調査を続け、通算100カ月近くアフリカ大陸をうろつきまわっていたので、アフリカ南端のケープからエジプトのナイル川河口カイロまで地中海へ抜ける壮大な探検旅行を誘いかけてこ

写真１　1988 年大晦日、BB 小屋にて

られたのでした。

おもろい旅、特に未知のルートを探検するような話には目のない私はすぐその気になったのだが、ちょうど 63 歳の定年退官を数カ月後の翌 2004 年 3 月に控えていたので、「ええな、よっしゃ行こう。けど定年で京大を去ったあと一段落して、2005 年になってから行くことにしましょうや。それまで待ってちょうだいよ」。そして急遽「アフリカ縦断計画」は現実味を帯び、具体的に進みはじめたのでした。

初めはべべ夫妻とジロー夫妻 4 人の老人の杖がわりに若い大学院生を 1 人連れて、5 人で行くつもりだったが、話を聞きつけた野村ズッパさんが「わしも是非一緒に行きたい」と言いだした。それではというので車を 2 台借りることにして、すると 4 人ずつ 8 人が乗れるから、若い院生を 3 人にして賑やかに旅行しようということになった。アフリカ・センター界隈の連中から通過予定の国々についての情報をかき集め、スーダンは当時政情不安が続いていて通過困難だと分かったので、地中海まで抜けることは諦め、ケニア北部の砂漠地帯を今回の旅の終着点とすることになったのでした。

四輪駆動のトヨタハイラックス・ダブルキャビンの 1 台を私が、もう 1 台をズッパさんと院生の藤岡君が交代で運転することにして、ヨハネスブルグから先ず南へ向かいアフリカ大陸最南端に位置するケープ州のアグラス岬まで行ってここを出発点とする。そこからナミーブ海岸砂漠のスケルトン・コーストやブッシュマン壁画が描かれた岩山、カラハリ砂漠のブッシュマン集落、世界第 2 のビクトリア瀑布、ザンビアのミオンボ疎開林地帯、マラウイ湖岸、タンザニアのチンパンジー観察基地、セレンゲッティ国立公園などと見たいところを巡ってジグザグに蛇行しながらケニアに至り、北部の砂漠地帯まで北上を続けました。車は悪路のドライブに打ち勝てず故障が続出、69 日間の長旅に老人連もくたびれ果て、最終目的地のレンディーレ・ランドとトゥルカナ湖までは到達し得ず、遊牧民サンブル族の住むマララルからナイロビへと引き返すことになってしまいましたね。

このアフリカ縦断旅行の詳細は、すでに 2006 年のニュースレター No.38, No.39, No.40 に掲載したので、読んでくださった方も多いと思うし、2017 年に刊行した『アフリカ文化探検』にも転載しています。こちらにはカラー写真をふんだんにあしらって、770 ページを超える大部の本の 639 ページから 683 ページまでに挿入されています。

この旅行のメンバー 8 人はその後も京都や東京で何度か集まり、あのしんどかったけれど、しかし初めて訪ねる未知の地の面白く見どころも多かった長旅の思い出話に花を咲かせたものでした。院生だった人たち、ナミビア北部のオヴァンボ農民の樹木利用を調べていた藤岡悠一郎君をはじめ、ブッシュマン研究仲間の丸山淳子さん、アンゴラから内戦のためザンビアに避難してきた人たちの社会に住み込み調査を続けてきた村尾るみこさんたち 3 人もみな立派に学者となり、それぞれ福岡、東京、京都の研究機関に元気に勤務してますよ。

べべちゃんと最後にお会いして歓談したのは去年 3 月のお彼岸の日でした。京都は西陣、千本中立売の仁和寺街道西入ルにある現役時代から入り浸っていた一杯飲み屋の「月の出」で黒部中流合宿、十字峡横断両パーティー合同の懇談会をやったときでしたね。日曜、祭日はお休みのところを私と同い年の「月の出」の女将さん、房子さんが快く店を開けてくれて楽しく一夜を過ごしました。べべちゃんはその時もう肝臓を悪くしていてお酒は飲まず、ノンアルコールのビールもどきを飲んでましたが、しかし人一倍お元気で昔話に花を咲かせ、歌をうたって盛り上がりましたね。

私が書いた最新の本『ブッシュマンの民話』を今年の正月に送ったら、喜んで読んで下さり、「おもろかった。そやけど今鼻汁が出てチリ紙だらけにしててな。熱もないし、頭が痛いわけでもないけど、鼻水だけなんや」とか、メールでのやり取りがありました。それが最後の交信だったと思いますが、私自身もよく鼻水が出るので、あのやり取りはしっかり記憶してます。

4月になり、標高の高い信州安曇野でも桜が散りはじめたなと思っていたら、笹ヶ峰会MLからお亡くなりになったと連絡が入り、突然のことでびっくりしてしまいました。せめてお葬式にと思いましたが、コロナ騒ぎで電車の旅もままならず、ごくひっそりとお弔いされたと伺っております。コロナ禍が収束したら是非お世話になった人びとで集まって賑やかにべべちゃんを偲ぶ会をやりたいですね。

べべちゃん、どうぞ平穏に天国でお暮しください。私らもそのうちそちらへ行きますから、今度はどこへ行きましょうかね。

俺はもう十分にやった

栗田靖之

私が京大山岳部の一回生のとき、新人歓迎山行が北山荘であった。その時大きな焚火の側で、久しぶりに笹谷さんに再会した。というのは、笹谷さんと私は、大阪の追手門学院中学部の先輩と後輩の関係であった。後輩の私は、笹谷さんのことをよく覚えていた。なにしろ中学生の頃から並みはずれて大きな頭をしていて、成績も抜群に優秀だったので、後輩からはまぶしい先輩であった。笹谷さんは甲南高等学校に進学した。その笹谷さんは、山岳部では、皆からべべちゃんと呼ばれていた。

一回生の夏山合宿が剣岳であった。源次郎尾根を登って剣岳の頂上にたどり着いた。頂上で一休みしていた時、べべちゃんが「栗田は銀閣寺のラーメン屋の親父に似ているな。お前のあだ名はラーメンや」と剣岳の頂上で命名された。

べべちゃんの回生は、大変個性的な人が多かったが、その中でもべべちゃんは、その豪快な性格で後輩に慕われていた。

私が2回生の1961年、現役学生だけで海外に登山遠征隊を送ろうという話がおこり、私がインドに登山事情を調査に行くことになった。飛行機が香港空港に到着したら、べべちゃんが空港に来てくれていた。当時はトランジットカードを持っていると空港内の何処にでも行け、誰とでも会うことが出来た。初めての海外で緊張していた私は、べべちゃんと会えてホッとした。べべちゃんは、華やかな空港の売店で煙草を一カートン買ってくれて、これを持って行けと渡してくれた。大学2回生の私には、外国の煙草を、それも一カートンも手にいれて、まるで宝物を贈られたような気分になったのを覚えている。当時べべちゃんは、東友貿易という会社に勤めていた。「帰りには寄れよ。好きなだけ中国料理を食べさせてやる」と言ってくれた。

それからは、お互いに何度も大阪で会う機会があった。べべちゃんは、押しも押されもしない立派な貿易商社のビジネスマンであった。

1968年、私は大学院生のとき笹ヶ峰ヒュッテで出会った女性と結婚することになった。仲人はなかった。それを聞いたべべちゃんは「今まで色んなことをしてきたが、まだ仲人はしたことがない。仲人をさせろ」という話になって、お願いした。

べべちゃんといろいろと仕事をしたのは、1968年頃からのブータン遠征計画であった。桑原武夫さんとべべちゃんの二人がブータン訪問を願い出る手紙は、ケサン王妃が日本を訪問したとき接待役を勤めたべべちゃんが書いた。ある時、書いた手紙をネイティブスピーカーに見てもらってくれといわれ、知り合いのイギリス人にチェックをお願いした。そのイギリス人は、はじめは、うっとうしい顔でその手紙を読みだしたが、途中から真面目な顔になった。そして最後に、この手紙は私が今まで見た日本人の文章で、一番格調の高い英語で書かれている、と感心していた。べべちゃんは、語学には特別の才能があった。香港でビジネスをしていたので、広東語が自由に話せた。それに英語はイギ

リス人のお墨付きである。本人は、甲南高校でドイツ語を習ったので1000までドイツ語で数えられるぞと、笑い話のような自慢をしていた。また仕事を辞めてからのある時期、北京語をさらに磨きあげるために、月に一度は北京の語学教師のもとに通っていた。

これだけの言語の才能があった上に、ベベちゃんは「中国好き」であった。とりわけ中国の歴史は、辺境での異民族との交流史をもふくめて、たいへん博識であった。ベベちゃんの中国観は徹底したリアリズムであり、国家のイデオロギーなどには関係なく、徹底したリアリストの目でみる国際感覚を持っていた。

ベベちゃんは、現在の自分は旅行家であると言っていた。語学力と根っからの中国好きで中国をくまなく旅行していた。その中でも一番詳しかったのは、チベット自治区についてであった。チベットには、十回ほど行っていたと思う。その中でも話を聞いて驚いたのは、幼馴染の野村明賢さん等と聖山カイラスを巡礼した話であった。途中の5630メートルのドルマ・ラ（峠）では、高山病のために本当に命が危なかったという。中国では新疆ウイグル自治区、青海省、四川省、白頭山登山、吉林省の広開土王碑への旅など、広い範囲におよんでいた。その他には、アフリカ大陸を南から北まで自動車で縦断した旅行などがある。

本業の貿易業について、一度話したことがあった。その時は、ベベちゃんはもう自分の商社を閉めていて引退した身であった。故宮の掘に沿った並木を歩きながら、もう一度、貿易のビジネスを始めたらどうですかと聞いてみた。ベベちゃんは、商売というものは、所詮は人脈や。人脈を築くためには友達を作らないとあかん。そのためには大酒を飲まんならん。俺はもう十分にやった、と言っていた。

このベベちゃんの類まれな商才を見抜いていたのは、アサミ夫人である。ベベちゃんが貿易会社に勤めていた時、「この男をこのまま、人の下で朽ち果てさせるのはもったいない。彼に会社を立ち上げさせよう」と考え、その決心をさせたのは、アサミ夫人であった。

会社を閉めてからは、趣味の世界に明け暮れていた。その一つは、クラシック音楽やオペラであった。音楽会に行くために、東京や大阪だけにとどまらず、ウイーンやニューヨークのメトロポリタン劇場に気軽に出かけて行った。このクラシック音楽への嗜好も、アサミ夫人からの影響であった。また美食家であり、その日に仕入れた材料を工夫して料理を出す黒門市場近くの板前料理店をこよなく愛していた。酒豪であり、まだ日本でオーストラリアのワインが知られていないときから、オーストラリアワインを愛飲していた。

2011年、ベベちゃん達とブータンへの旅に行った。その時、同行の一人が転倒し、脳内出血の重傷を負った。偶然ブータンで学術調査をしていた坂本龍太医師の治療を受け、患者をバンコクまで搬送した。バンコクの病院は、バンコクでの開頭手術をすすめたが、日本から急遽バンコクに駆け付けてくれたAACKの松林公蔵医師と相談し、医師と看護師の乗った小型飛行機をチャーターして東京まで搬送した。このような思い切った対応ができたのも、決断力のあるベベちゃんだからこそであった。この事故が終わった後、「山岳部を卒業して何十年もたったが、山岳部のマネージャーだったことを思いだした」と話していた。

2019年9月、笹谷さん夫妻と姪御さん、それに私たち夫婦がご馳走になる機会があった。私たちは、昨年、結婚して50年経ちましたと報告した。ベベちゃんは喜んでくれて、「春になったら貝料理を食べよう。しかしそれまで元気で居れたらの話やけどな」と言っていた。私は不吉なことを言うなと気にかかった。

2020年3月20日、ベベちゃんから電話があった。電話の内容は、イタリアのベルガモはコロナ・ウイルスで大変なことになっている。自分はいま病院に居るので、ベルガモに居る山岳部の先輩・谷泰さんにお見舞いのメールを送ってほしい、と言われた。私は早速、谷さんにメールを送った。谷さんからの返事はベベちゃんのメールアドレスに転送したが、その返事を読んだかどうかを確かめる前に、ベベちゃんは旅立たれてしまった。

私はあのことづけは、ベベちゃんから敬愛する谷さんへのお別れの挨拶だったと思えてならない。

べべちゃんとオペラ

島田喜代男

BB 先輩ご夫妻は音楽好きで、オペラも大好きであった。NY のメトロポリタン　オペラハウスには結構通っておられたものと推察します。私も多少、オペラが好きでしたが、何かの機会に NY のオペラの話が出て、ご一緒させていただきました。それ以来、NY のオペラに通いだしたかに思います。

NY のオペラハウスは、舞台裏が巨大で、幾つもの舞台セットが用意出来るため、11 月から 3 月まで、日曜日やクリスマスの日などを除き毎日公演があります。当時、私はセント・ルイスに於ける会議が、年に 10 回予定されていましたので、月、火、水の会議の後、木曜日には、打合せなどをすませて、夕刻の NY 直行便に乗ると、時差のお陰で、食事をしても 8 時半の開演に間に合いました。その場合、木、金、土（昼間）、土（夜）の 4 演目、仮に仕事が延びても金、土（昼間）、土（夜）の 3 演目に通い、日曜に帰国していました。

はじめの内はホテル滞在だったかと思いますが、すぐに BB ちゃん所有のパークアベニューのセントラルパークに近い素晴らしいコンドミニアムに泊めていただく様になりました。ご不在の時は錠を貸していただいており、勝手に泊まらせていただきました。そちらに来客があるとブロードウェイのマンションの鍵も預り、そちらにも泊めていただきました。NY の中心地のホテル予約は、感謝祭辺りからクリスマス、正月辺りまでは極めて困難でもあり、本当に有難いことでした。更に、驚いた事には、ダフ屋をも紹介していただき、電話 1 本でどんな時でも、良い席を取ってくれるので、この上なく有難いことでした。BB ちゃんの NY での顔の広さには改めて驚かされました。

BB ご夫妻と「椿姫」など、悲しくも感動的に終る悲劇演目に行く時など、晩ご飯のあと、あの笑顔で「さあ、そろそろ、泣きに行くか〜」と席を立ったりされた事もなつかしい思い出です。オペラから帰って「泣けるね〜」と一杯飲んでから休んでいました。同じ悲劇でも、「オテロ」では、旅の疲れかなにかで、BB ちゃんと私は途中少し寝ていた様で、奥さまのひんしゅくをかった事もありました。

その内に、何かの切っ掛けで、BB ちゃんが「おい、ヴェローナにでも行くか？」とのことで、イタリア・ヴェローナの野外オペラに行くことにもなりました。オペラハウスのオペラは冬場だけですが、野外オペラは夏場だけです。紀元前後に建てられた古代ローマ時代の巨大な円形闘技場がオペラ劇場となります。巨大とは言え、音響は、特に平土間席では抜群です。BB 先輩ご夫妻、BB ちゃんの親友の野村美術館長、原田 A 先輩と私の 5 名で、夫々がミラノに集まり、ヴェローナではオペラ劇場のある旧市街にある厳かなホテルに 7 泊の滞在でした。演目はアイーダ（エジプト軍の将軍が、勝利の後、凱旋するも、王女の奴隷の召し使いと恋をして後、死刑になる）、ナブッコ（旧約聖書のネブカドネザルのイタリア語読みの略。「行け黄金のつばさに乗って〜」の大合唱はイタリアではこよなく愛されており、必ずアンコールに応えてくれます。）と椿姫等を観劇したと記憶しています。昼間は、ヴェローナ自体が観光の場で、ジュリエットの家などを見て歩いたり、ガルーダ湖畔の静養地シルミオーネ等に行ったり、の旅でした。

オペラの思い出だけを記したが、所謂「BB ちゃん旅行」にも国内外、幾つもお供させていただいた。カナダ北極圏での魚つり、蒙古横断、馬に乗っての西ネパール旅行の他、数回にわたる香港でのグルメ旅行と、どれも BB ちゃんでなくては企画出来ないものばかりです。香港での、あのおいしいごちそうは忘れ難いものである。

次々と思い出は浮ぶが、どれもこれも BB 先輩がいなくてはあり得ないものばかりであり、感謝と喜びは計り知れない事この上ありません。ご冥福を祈りつつ。

笹谷べべさんとの旅を回想する

田中昌二郎

私は幸運にも笹谷さんとチベットなどへ旅をする機会に恵まれた。
2004/8/10 ～ 9/3　甘粛省・青海省・アムネマチン探訪・西蔵自治区・雲南省へ
2006/8/9 ～ 8/18　青蔵鉄道で西寧から拉薩、そして明永氷河へ
2006/10/9 ～ 10/29　明永から川蔵公路・八松措・拉薩・川南への旅である。

2004 年夏、「アムネマチンと黄河源流の旅」に誘っていただき、「せっかく青海省最奥部まで行くのだから、そこからチベットへ入り雲南へ抜けて梅里雪山にお参りに行きませんか」と、うれしい提案があった。

笹谷さんは AACK ニュースレター NO.31（May 2004）に、『西蔵旅游消息』と題する旅の記録と紹介記事、或いは檄文を書いておられる。

その中に『巴顔客拉山口の峠（五千 m、黄河と揚子江の分水嶺）に立ち、いつかここから南行し玉樹、昌都を抜けて雲南へ出たいとおもいました』、また、『青海省から玉樹、徳格、昌都へでて川蔵北路を丁青、巴青、那曲、拉薩へ辿る旅を最後にします』と、この地帯への強い思いを述べられている。それでは、茶馬古道の故地、未踏の 6000m 峰が屹立する怒江（サルウイン川）上流域に入れないでしょうかと欲張った案を出し、笹谷さんが年来重用する雲南のガイド郭建文さんから申請して貰ったところ、許可が下りた。郭さんが有力者を頼って申請したからとのことだが、これには旅の達人笹谷さんの多大の援助があって実現したのだと思っている。

アルバムと USB メモリーを見ながら、もう十数年もたってしまった旅を思い出している。

2004/8/10 ～ 9/3　甘粛省・青海省・アムネマチン探訪・西蔵自治区・雲南省へ
先ずアムネマチンと黄河源流を訪ねる

この旅は、AACK ニュースレター NO.33（Dec. 2004）に中島道郎さんが詳しく報告されている。笹谷さん手配の下、メンバーは高野ゴジラさんとその義兄・武生盈さん、田中昌二郎、JAC 京都支部の秋野子弦さん、上田闊三郎さん、そして西寧での高所医学会終了後に合流の中島道郎さん、松林公蔵さんの総勢 8 名であった。

笹谷さんの配慮でガイドの喬さんは沢山のプランを用意していた。特に旧石器時代の墓地遺跡見学は興味深かったし、青海湖を見るだけではつまらんと、琵琶湖の 6 倍の広さの塩湖を一度一周しようと一日がかりでドライブもした。湖の周囲の草原には良い花が沢山咲くのだろう、道路の両側に養蜂家達が巣箱をたくさん並べていた。また喬さんの出身氏族であるモンゴル系吉祥土族訪問ツアー宴会も楽しかった。大きな木造建物の中庭で民族舞踊が舞われて宴会が始まり、白酒がまわってきて、笹谷さんや他のメンバーも民族衣装を着せられて踊り出し盛り上がった。

翌日、3 台のパジェロに分乗してアムネマチン山塊周回 3 泊の旅に出た。笹谷さんは一度この旅をトライされているが、悪天候のためその山容を望むことは出来なかった由。幸い今回は好天に恵まれ、幾つもの 4000m を超す峠を越え、あのアムネマチン、一時は世界一の高峰かと胸をときめかせた山・瑪卿崗日（マチェンガンリ）の南面、東面、更に北面の眺望を満喫し、喬さんが用意してくれた缶ビールで乾杯した。笹谷さんを囲むその集合写真に幸福感が溢れている（写真 1）。

そして青海省最奥の町・瑪多（標高約 4000m）の夕食前、寒い招待所の食堂で中島ドクターの特別講義「高山病について」を受け、質疑応答の後、白酒（パイチュウ）で乾杯。最奥の招待所でどんな食事が出たか覚えていないが、会話がはずみ白酒がすすんだ。夜半より風音強く雪も舞い、チベット犬に吠えられながら恐る恐る広場を横切って便所へ行ったことも忘れられない。

念願のチベット入り

8/20　笹谷、田中は青海省最奥の町・瑪多で

写真１　アムネマチンを背に。左から、高野、武生（高野義兄）、田中昌、笹谷、中島、松林、JAC の上田、秋野。

一行と別れ、夜半の雪で白くなった国道 214 号を南下する。ガイドは勿論カンパ族の青年郭健文さんとベテラン運転手の江楚（ジャンツォー）さん。笹谷さんは長途の旅に備えて、信頼のおけるペアーを遠く雲南から呼んで準備万端怠りない。巴顔客拉山口に立ちチョルテンに旅の平安を祈る。金沙河やメコン川の上流の谷を渡って玉樹（ユーシュ）で１泊。翌朝、結古鎮の広場におおよそ百人を超える人が集まり、女性の仲買人もいて、銘々札束を懐から出し小声で盛んに商談している。郭さんに聞くと、薬草である冬虫花草の市が立っているのだという。生々しいがたくましいチベット人の生活を見た。

何度も車の壁に頭を打ちつけながら、極めつけの悪路を越えて嚢謙（ナンチェン）で１泊、類烏斉（リウォチェ）のゴンパを見て、陽のとっぷり暮れた東チベット最大の都市昌都（チャムド）に入った。郭さんは直ちに公安詰所に出頭して届けをする。四川省から長距離バスに乗って許可なしに入ってきた白人男性一人が、公安に見つかり強制退去させられたという。監視の目が光っていることを知る。

8/23　昌都滞在、休養と市内見物。チベット族の住む地域は昔のまま。川を隔てて新しいビルが建ち並ぶのは、新規に入ってきた漢族の街。こんな光景をこのあと奥地に入っても見せつけられる。

そして怒江（サルウイン川）源流域へ

8/24　この一日は感動の連続だった。レンガ色に渦巻いて流れるメコン川沿いに下り、メコン川・怒江の分水嶺・浪垃山峠を越え、4000m を超える高原を西行し、荒涼とした怒江（サルウイン川）の断崖に立つ。数百メートル一気に下って、鉛色した怒江を加玉橋で渡河。少し上流に流れ込む支谷のゴルジュの赤茶けた岩壁を穿った道を登って康紗（カンチャ）郷に入ると景色は一変する。大きく開けた高原に緑のチンコー麦の畑がパッチワークのように広がり、家族総出で採りいれた大きな麦束を何頭ものチベット馬に積んで家路を急ぐ。ゴルジュの奥の隠れ里、或いは桃源郷かと感動した。凡そ 12 時間のタフな車の旅を終え、古来より往来の要衝･洛隆（ロロン）に入った。招待所の主人から、窓際には物を置かないようにとの忠告があった。泥棒が窓を破って入ってくるらしい。物騒なところだ。翌朝、ガイドの郭さんの目が真っ赤だったのは、きっと隣の部屋で寝ずの番をしてくれていたのに違いない、笹谷さんが信頼するのも当然だと思った。

8/25　大きな峠を三つ越え、三つの集落を越えて、普玉（プユー）谷の道路状況を偵察した後、旧辺覇（ベンバ）を通って、その隣に新しく作られた町、新辺覇に着く。鉄筋コンクリート造りの中国電信援建の辺覇県綜合文化中心（センター）に泊まる。東チベットの最深部に都会のホテルと全く変わらない設備である。しかし何かおかしいぞとべべさんが便所をのぞくと、近代的な水洗便器の横に、たっぷりと水を張った

写真２　サルウイン川の源流域　普玉の谷にて。未踏の 6000m 峰を背に。

写真３　明永村のチャシ村長と

大きなポリ桶があり、ポリのシャクが浮いていたので二人で大笑いした。

未踏の 6000m 峰が屹立する谷へ

8/26　今回の目玉、普玉谷とゴヨン谷に入る日だ。2002 年に横断山脈研究会会長中村保氏がキャンプした跡を越えて右股に入る。切り立った三角錐の未踏査のコナⅠ峰 6378m、Ⅱ峰 6334m の真白なヒマラヤ襞の豪華な絵巻を見る（写真 2）。左股の盟主コンガ峰 6488m の頂上部は雲の中だったが、裾部分の豪快なヒマラヤ襞が見られた。旧辺覇近くのゴヨン谷左股へも入り、車で十数回渡渉して 4090m 付近の台地まで入り、モレーンを登って 2 つの氷河湖を望むがガスが濃く、この辺りで登れそうな山であるゴヨンⅠ峰 6252m・Ⅱ峰 6140m が見られず、残念。ベベさんの言葉に甘えて怒江上流域へ入れないだろうかと言ったおかげで、手つかずの 6000m 峰を目の当たりに出来た。感謝のほかない。

明永村へ、そして焼松茸

8/27　運転手江楚（ジャンツォー）さんは、怒江越えの天気を心配したので予定を早め帰途に就く。怒江を渡り、目もくらむ断崖を今度は登る。路肩が雨で緩むと確かに危険だ。往路に昼食をとった布学沟（プーシュエク）の食堂兼旅籠に泊まり、昌都空港、邦達、左貢、東達拉、芒康へ。途中、メコン川屈曲部に大吊橋架橋工事の現場に出くわす。運転手江楚さんは、通行停め解除になると、悪路もお構いなく他車を強引に追い抜き、先頭で大吊橋を快走した。久しく悪路の低速走行だったので爽快だった。

8/29　曲孔卡温泉に泊まり温泉に浸かって、幾つもの峠越えの疲れを癒す。ここまで来ると標高も下がり緊張も解ける。

8/30　雲南省境を越えて、梅里雪山景区に入るとゲイトがあり。入域料がいるのに驚く。明永村の若布桑牧客桟（民宿）泊。チャシ村長、宿の主人と会食する（写真 3）。

8/31　村の道に真っ赤な横断幕が張られている。勉強不足で良く読めないが、「明利に淡薄なチャシ同志に学習し、滅私奉献的精神を･･･」。そのひとつの例が、この村の大きな収入源・氷河見物登山の馬の権利を各戸に平等に割り当てているという。その馬に乗り明永氷河を登り太子廟参拝し灯明をあげる。氷河沿いに作られた架橋を登り、黒い土に覆われ波打つ姿に圧倒された。展望台で黙祷し下山。村外れから梅里雪山の頂が一瞬顔を覗かす。飛来寺の追悼碑にも参った。道路沿いに立ち並ぶ松茸採取小屋で松茸を買い、暗くなって徳欽に入る。裸電球にかざして大勢が松茸を選別して取引している。玉樹・結古鎮で見た冬虫夏草仲買人の姿を思い出す。

翌日、この旅最後のイベント、ガイドの郭さんの家で焼松茸をする。ベベさんは「肉を日本から持って行き、雲南で豪快に松茸のすき焼きする」と良く言っていた。長い旅だったので肉は無理だったが、大事に日本から持ってきた金網と醤油で焼松茸のせんど食いを楽しんだ。

この蘭州から中甸までの車の走行距離は 4810km だった。

2006/8/9～8/18　青蔵鉄道で拉薩、そして明永氷河へ

2006年7月に西寧拉薩間を結ぶ青蔵鉄道が開通した。これは乗らずばなるまい、そして明永へお参りに行こうと笹谷さんから誘っていただいた。メンバーは、斎藤惇生さん、酒井敏明さん、笹谷夫妻、上尾庄一郎さん、田中昌二郎の6名である。

ニュースレターNo.41（April 2007）に『青海から西蔵､雲南の旅の報告　青蔵鉄道乗車記』として斎藤惇生さんの詳しい報告がある。

8/10　西寧駅20：07発ラサ行きの濃い緑色の車体に､拉薩―西寧と書いたプレートが眩しい。何せチベット高原を走る列車で拉薩へ入れるというので大人気で、中国各地から観光客が押し寄せ、ついに切符は抽選販売となり、西寧の喬さんが頑張ってくれたが、硬車寝台の車両も違うバラバラの席となった。そのため、北方民族だろうか両親、息子、娘も皆が1m80以上の痩身4人家族や、上海から来たという母と息子などと、片言の英語で膝を突き合わせた旅を経験できた（写真4）。

8/11　朝、ゴルムドで長時間停車休憩。朝のホームに降りてカップラーメンを食べる。ここから南へ向きを変えて、唐古拉山口（峠）を越え拉薩へ向かう。食堂車の予約も混み合い、笹谷さんに奮闘してもらった。真っ暗になってラサ駅に着く。念願の拉薩入城である。

翌日から二日間かけてラサ市内のノルブリンカ、パルコル、ジョカン寺など参観し、チベット文化に触れることが出来た。中国登山協会の重鎮の訪問があり、斎藤Yさんと旧交を温める小宴があり、陪席させてもらった。ベベさんの配慮だろうか。

14日になってやっとポタラ宮殿参観の予約がとれた。城なのか仏殿なのか。見学者が多いので残念ながら一時間で退出させられる（写真5）。

8/15　ラサ空港からシャングリラ（旧名　中甸）へ飛び、4輪駆動車2台に分乗し明永村に入り、新しく出来たホテルに泊まる。

翌日は　馬に乗り明永氷河展望台にて17人を追悼する（写真6）。帰途、森の中でチャシ村長に出会う。斎藤Yさんがチャシ村長の多年の配慮に感謝の挨拶をされ、記念写真を撮る（写真7）。念願の拉薩に入りポタラ宮も参観でき、先輩方の謦咳に接することができた得がたい旅だった。

写真4　青蔵鉄道車中にて。左から笹谷、斎藤、酒井。

写真5　ポタラ宮前にて。左から酒井､斎藤､上尾､笹谷､田中昌。

写真6　明永氷河にて追悼(2006.8.16)。左から田中昌、酒井、斎藤、笹谷夫妻、上尾。

写真７　明永の森でチャシ村長と。左から酒井、田中昌、チャシ村長、斎藤、笹谷夫妻、上尾。

写真８　東蔵考察団　明永氷河にお参りする（2006.10.11）。左から伊藤、松井、福本、笹谷、寺本、田中、原田。

2006.10.09 ～ 10.29　雲南・東蔵考察団

明永氷河にお参りをして、先に雲南に調査研究に入っている医学隊と合流して川蔵公路を辿り、各地の名峰や氷河地帯を見物して拉薩へ入ろうという計画である。

笹谷さん計画総指揮のもと、寺本巌さん、原田道雄さん、福本昌弘さん、松井千秋さん、伊藤寿男さん、医学隊の松林公蔵さん、奥宮清人さん、石根昌幸さん、木村秀生さんと田中昌二郎の総勢 11 名の大部隊となり、ガイドはやはり郭建文さんである。

笹谷さんから団員への連絡メールが残っている。
「べべです（略）
車は五台　内二台は　医学隊四人と荷物用です　　予定では　全員が二十一日にラサ入りします　　ラサ見物は　手配しますが　観光客殺到のため　ポタラ宮の入場は　当日まで不明です　　航空券の確認は来週中にできるとおもいます　　ラサからの切符は　入蔵許可証とセットですので　単独での手配は難しいです　　また　言葉の問題で　ラサまでは　全員同じ行動をする必要があります　　途中の地区の通過に非常に厳しく許可証を要求する所がありますので　別行動はできません　　武装警察　公安　解放軍　外交部から四枚の許可証がいります
これだけ揃えないと即時退去です（中略）
雲南北部には　丸投げ出来るような旅行社がなく　昆明の大手に頼むと　高いうえに　自由がききませんので　毎日郭さんと電話とファックスで交渉してます　　ラサは　また　ラサ地場の旅行社に依頼するという法律があり　別途交渉中です
いまの　状況はこのようです
なにか　問い合わせがあれば　また連絡してください　　べべ」

難しい手配をしてもらっていたのだ。

かくして笹谷さんの幾多の交渉、手配の結果、雲南・東蔵考察団が出来上がった。
10/9　昆明経由　香格里拉（中甸）へ。明永氷河にお参りして（写真 8）。飛来寺に戻り医学隊と合流、メコン川沿いに北上して川蔵公路を拉薩に入る。拉薩観光の後、拉薩の南の川南、沢当観光して帰国する。見どころ満載の旅だ。

笹谷さんはこのルートをすでに踏破されているが、我々にこの素晴らしい景観をとの配慮だろう。然烏湖畔から拉古村に入り、緩やかに広がる氷河から屹立するゼ 6127m やゴンヤダ 6423m を眺め、この氷河のスケールの大きさに圧倒された。更に米推氷河を訪ね、ゲムソング 6450m を仰ぎ見、また波蜜の谷にも入り、秘境易貢蔵布に入った。樹木が覆いかぶさる泥濘の道を、時には全員車を降りて車を通し、半日かけて易貢村へ入ったところ、中国電信のパラボラアンテナ工事をしていて、こんな奥地までと驚いたが、治安、統治上、電信網を張り巡らせているのだろう。魯朗の高原を越え、セチ・ラに上がり、ナムチェバロワとギャラペリを遠望し、八松措に入る。湖畔から氷雪を頂いた怪

奇な峰が望める。更に湖の奥の措果村までまたまた悪路を行き、豪快な山々の展望を楽しむ。そして拉薩観光、沢当地区古寺を拝観し、チベット王朝発祥の地・蔵王墓にも参ってポタラ宮にも参り、満腹満々腹の旅だった。

帰国後、京都市内の料亭で反省会を開き、この旅の思い出を語り、感激した山々への再訪のプランなどを話し合った。ベベさんも、あの易貢蔵布を遡って尼屋、嘉黎から川蔵北路へ出る未踏のルートを行けないか、誰かやってくれんかと思っておられることは分かっていながら実現することが出来ず、忸怩たる思いでいる。

その後、病気の治療に専念され、あれほど好きだったアルコールも止めて節制に努めておられると聞いたが、突然の訃報に驚いた。コロナ禍による長距離移動自粛の最中だったので会葬者は少なかったが、各地からお供えの花が続々と届いて、祭壇の周りは供花で埋め尽くされていた。選ばれた音楽が流れる中、ご遺骸に献花しお別れをして祭壇正面のテレビ画面をみると、ご結婚当時のご夫婦のモノクロの映像があった。大変お世話になりました。楽しい旅をありがとうございました。ご冥福を心よりお祈りいたします。

追悼　笹谷ベベちゃん

能田　成

突如として降って湧いたコロナ禍に世界中が右往左往していた2020年4月、笹谷ベベちゃんは帰らぬ人となった。もうあの包容力のある温顔に接することは二度とないと思うと、寂寥感で胸がつまる想いである。

ベベちゃんが京大へ入学したのは1957年で、その前年56年はマナスル初登頂を多くの人々が祝福し、そして南極観測隊が出発した年でもあった。またチョゴリザ登頂は翌58年のことであったから、ベベちゃんが在籍したその頃の京大山岳部の活動は大きな高揚期にあった。

卒業後のベベちゃんは自ら起業した会社経営にあたられた。と同時に後輩も含めた山岳部の仲間たちへの変わらぬ思いを私達は決して忘れることはない。特に、ベベちゃんを中心とした仲間たちの貢献なしには、笹ヶ峰ヒュッテの再建はあり得なかったと言えるだろう。そして、あの素晴らしい雰囲気での音楽会、ワインと語らいの時。音楽会を主宰された原剛、世津子さんご夫妻に次いで、ベベちゃんまでもが帰らぬ人となってしまったけれど、笹ヶ峰音楽祭の楽しい思い出は私の宝物である。

音楽のことで私はベベちゃんに大変お世話になったことがある。2015年12月に京都ミューズ主催のベートヴェン「第九」演奏会の合唱に参加したとき、ベベちゃんが声をかけて関西在住の山岳部OBが10数名も演奏会を聴きに来てくれた。そのおかげで私はチケット売り上げランキングの上位に入り、賞品に指揮者・広上淳一氏やソリストたちのサイン入りの色紙を貰った。そして慰労の会を催してくださったのだ。こうしたさりげない思いやりを、他の多くの後輩たちも受けてきたのだ。

その半年後、私は同じミューズ主催のヴェルディ「レクイエム」にも参加した。この曲は第九よりも長くコーラスの出番も多く、練習もきつかったけれど、きれいな曲がたくさんあって、それだけに演奏会が待ち遠しかった。ところが、本番当日の朝にベベちゃん宅のネコたちが集団脱走するという事件が起こった。そのためにレクイエムを聴いていただくことができなかったのは、今も大きな心残りである。それから4年後、まさかもう一度、本当に鎮魂歌を歌うことになろうとは。

・・・登山におけるパイオニアワークも既に色あせたコピーに過ぎないのか。夜の更けるのも忘れて語り合った「山への想い」も今では擦り切れたSPレコードの唄う挽歌に聞こえる。笹ヶ峰ヒュッテでの楽の調べとワインとさんざめきの想い出を胸に、椿姫第3幕でヴィオレッタが「さようなら、過ぎた日の美しい喜びの夢よ」を歌うように最終章が近づいて来るとすれば、いささか悲しい。もう少し毅然と第4楽章のコーダを奏でて最後にしたいものだ。その時には、ベベちゃん、私も日本酒と鮒寿司を持参して伺います。

BB ちゃんに見せてもらった世界

甲斐邦男

京都に居るころに、なんの会かは忘れましたが赤垣屋で宴会があり、ジョニクロの差し入れを持って BB ちゃんが途中から参加されたのが、初対面だったと思います。香港かどこかからの帰りのようで、いろいろ商売している先輩がいるのだと感心しました。1981 年に東京に転居してから、妙高の原小屋に出入りするようになりました。数年後に、BB ちゃんが原小屋の横に小屋を建てるということなりました。この小屋は原さんの 3 軒目の山小屋ということで、原さんの経験とアイデアが生かされています（因みに、4 軒目が笹ヶ峰のヒュッテです）。この頃は、月に一回ほど、BB ちゃん、原さんと小屋に集合していました。

妙高に行かない時は、香港、ソウル、バンコクに時々出かけていました。当時、格安航空はなかったので、安い切符を手に入れるには、海外で購入すればよいと小屋で聞かされました。それで、HK ～成田～海外～成田～ HK という切符を購入することにしました。その後も香港にいくたびにチケットを購入していました。会社終業後、成田を出発し、現地時間 11 時ころに香港に着き、帰路は午後に香港を出れば、11 時頃には自宅に戻って、翌日は通勤していました。体力があったころです。

ある時は、BB ちゃん、原さんと香港集合で宴会をして、うまいものをごちそうになったり、街を案内して貰ったり、昔の香港の話を聞かして貰いました。まだ開発中の深圳まで出かけたりしていました。深圳の一部は建設されているが、ダンプカーがまだ走っている本当に開発中でした。まさに中国が経済発達中という時期です。

また、ニューヨークに遊び来ないかと誘われて、香港まで安い切符を買いに行って、夏休みに NY の BB ちゃんのコンドミニアム集合でした。西海岸までは何回か行っていますが、NY は行く機会が無く、初めてでした。NY は BB ちゃんのコンドミニアムに泊めてもらいながら、街をあちらこちら歩き回りました。アパートはメトロポリタンまで歩いて行けるところにあって、地元見物には最高の位置でした。NY には AACK の支部というものがあって、川瀬さん、酒井さん、BB ちゃんが遊んでおられたようで、夜の街を案内して貰いました。NY は、西海岸と異なるアメリカでした。東海岸では東部 13 州の中心地であったフィラデルフィア、ボルチモアまで鉄道で脚を伸ばし、昔のアメリカの面影を見ました。

また、BB 小屋には、BB ちゃんの同期やその前後の先輩達がよく集合していて、スキー、宴会などよく行われていました。多くの先輩達が集合するというのは、BB ちゃんの人柄によるものでしょう。名前は聞いて居たが、これまで会ったこのない先輩達に小屋で出会えました。彼らは、1960 年代の山岳部黄金期で、卒業後は高度経済成長を現場で引っ張ってきた世代です。当時では、それなりの社会的地位を占めていましたが、昔の学生時代やこれまでの人生の楽しい話をしていました。私の知らない時代の世界でした。これらの先輩との付き合いも、BB ちゃんがいたからこそできたのです。さらに、小屋につられて、私より 10 歳ほど若い後輩も参加していて、賑やかな小屋でした。いろいろな広い世界を見せてもらって、ほんとうにありがとうございます。

べべさんからいただいたもの

山田和人

コロナウィルス感染が拡大して世の中がざわつき始めた頃、田中ジローさんから「べべちゃん、亡くなったで」と電話をいただきました。あれから半年が経ちます。亡くなる 1 年前の 4 月、笹谷山荘（べべヒュッテ）のことでお会いしたのが最後でした。ご自宅、堺の近くまでこ

ちらから行きます、という僕の申し出に「ワシまだ歩けるで、梅田まで電車乗っていくがな」と言われて、杖をつきながら阪急梅田に現れたべべさんはお元気そうでした。阪急三番街の喫茶店で1時間程お話をしました。「ハラくんが逝ってしもうて、寂しくてしかたがない」と何度も繰り返されていました。別れ際に地下鉄までお送りします、と言う僕に向かって「何、言うてんねん、それぐらい一人で行けるわぃ」とこれまた気丈に振舞われていました。最後まで弱いところを見せないお姿が今も目に浮かびます。

べべさんとの出会いは、僕が現役学生の時の旧京大ヒュッテです。いつもハラさんと一緒に笹ヶ峰に現れ、現役学生にいろいろと差入れをしてくださるのでした。その時の様子はAACK Newsletter No.90に記しています。それからずいぶん経ってから、べべさんが言われていた言葉「京大ヒュッテでゴロゴロしている若者を釣り上げるのは簡単やった、お前がいちばん簡単やったなぁ」と。

1983年にべべヒュッテが完成し、この小屋のおかげで、僕は随分と楽しい、そして贅沢な時間を過ごさせていただきました。家族を持って子育ての時期、べべヒュッテでの休日は当たり前のように享受したかけがえのない時間でした。キッチンに立つべべさんが「今、美味い肉食わしたるで」と言うと、大人も子供も飛び上がって喜びました。そしてべべさん、ハラさんからは、大人数分の料理、山小屋の維持管理、そして一人の力でなく色々な人の力をうまく利用することを教わりました。

現在、僕は上高地で日本山岳会の山小屋（上高地山岳研究所）の管理人をやっています。

妙高高原とは違った自然環境の中に建つ小屋ですが、べべさんから教わったことが僕の仕事のベースとなっていることは間違いありません。この原稿を書いている10月中旬、上高地は秋シーズンを迎えています。べべさんと過ごした笹ヶ峰の鮮やかな紅葉とは違い、針葉樹林の中にあるダケカンバやカツラがくすんだ黄色の葉をハラハラと落としていきます。べべさんが亡くなられた寂しさと重なります。11月には上高地を閉めますが、「べべヒュッテのこと、うまくやってくれ」と三番街で言われたことを胸に妙高高原に戻って白い季節を過ごしたいと思います。ご冥福をお祈りいたします。

お世話になりました

横山宏太郎

笹谷さん、たいへんお世話になりました。まったく月並みだがこの通り、ほかに言いようがない。多くの方が追悼文を寄せられ、それぞれに感謝の言葉がつづられている。編集人としての立場上、読ませていただいた。せっかくなので、ほかの方とは少し違ったお世話になり方をお伝えしよう。

1977－78年、ネパールヒマラヤのランタン・リ偵察隊では、山の偵察だけでなく、登山許可取得交渉も大事な仕事だった。ネパール観光省で担当者と折衝することになる。それなら土産も必要だ。べべちゃんの会社でサリーの布を分けてもらえ。私としては、サリーは向こうが本場なのになぜわざわざ日本から持っていくのか、と不思議に思ったが、向こうでは日本の生地が人気なのだという。そこで笹谷興業を訪ねて、こんな次第です、お願いします、というと、たちどころに10枚ほどのサリー用布地を選んで渡してくださった。代金を払った記憶はないので、偵察隊に寄付していただいたことになるのだろう。

偵察を終えてカトマンズにもどってから、街の南はずれの観光省に自転車で何度も通った。時にはタクシーも使うが、ふだんの足は貸自転車だった。最近は大気汚染がひどいカトマンズだが、当時はまだ車もそれほど多くはなかった。

ネパール政府の地図には、ランタン・リは載っていない。地形も不正確だ。交渉は、観光省次官を相手に、まず山の存在を理解してもらうところから始めた。サリーを誰と誰に差し上げたか思い出せないが、話を友好的に進めるにはおおいに役立ったはずである。おかげさまで、解

禁時には許可を出すという約束をもらって帰国した。1981年、約束通り許可は届いたが、残念ながら、ランタン・リ登山は実現しなかった（時報No.9、p.57-64）。かわりに、AACKは1982年、カンペンチンに初登頂した。

私は1982年から6年半、武庫川女子大学に勤務した。もちろん、多くの先輩方のお世話によって実現したことである。クラス担任もあり、卒業研究の指導もし、たまには就職の相談を受けることもあった。なかには、なぜか就職活動がうまくいかない学生さんもいる。家政学部被服学科だから、繊維関係を扱う笹谷興業とは関係深い分野といえる。ある時、笹谷さんに相談すると、二つ返事で、「わかった、会社へ来るようにいうて」とのことであった。学生さんはもどってきて、「あっという間に決まってしまいました」と、キツネにつままれたというような顔をしていた。後日、笹谷さんに「大丈夫でしょうか」と聞くと、それぞれ長所を生かして使うから心配ない、とのことでほっとした。何人か採用していただいたが、皆、笹谷さんのもとで、のびのびと働いたであろうことは想像に難くない。

小屋に寄せていただいたり、おいしいものをごちそうになったりもした。メールではいつも私の妻と娘は元気にしているかと尋ねられた。私の関わったことで喜んでいただいたのは、1985年のブータンヒマラヤ、マサ・コン峰の初登頂くらいだろう。今回、原田A助さんのお手伝いをして皆さんに呼び掛けたところ、たくさんの追悼文をいただいた。おかげさまで盛大な追悼特集になったことで、お世話になりっぱなしの私としても、少し気が楽になる。ありがとうございました。

会員動向

会員異動

岡部岳人　自宅住所変更
根岸哲生　自宅住所変更
松井千秋　自宅住所変更
宮坂実　勤務先（職業）変更

編集後記

本年2月発行の92号編集後記では、新型コロナ禍の早い収束を願うと書きましたが、残念なことに先の見えない状況が続いています。皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

斎藤清明さんからは、台湾・玉山登山のお元気な様子に加え、三角点にまつわるお話をいただきました。笹谷哲也さん追悼文が、原田道雄さんの呼びかけに応えて、実に19編寄せられました。笹谷さんの存在の大きさを強く感じます。

95号にご寄稿の方々にお礼を申し上げますとともに、私の不手際により発行が遅くなりましたこと皆様にお詫び申し上げます。これまでと同様に定期発行を心がけていきますので、来年もぜひよろしくお願いいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り　2021年1月16日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日　2020年12月15日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　幸島司郎
発行所　〒606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究2号館4階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町1-8
㈱土倉事務所